第二部　赤い紅い朱い彼女
三章　　シエルタの即位
1
「いよいよ、明日、ですね」
　ウィルの少しだけ力の入った声にわずかに和みながら、私は彼から手渡された翌日の即位式の参列者名簿を眺める。人数は三年前のレティリアの結婚式より数百人以上多かった。この人数を制限し、招待状を持たぬ招かざる客を追い出さねばならない兵士達に、哀れみを覚える。私が小規模な即位式を望んでいても誰もそれを許しはしなかった。
「そうね」
　長かった。その思いは言葉にならずに胸に落ちる。けれど彼はそれすらも理解したかのように、静かにはっきりと頷いた。その一連の動作に安らぎを覚え、けれど以前は起こったであろう胸の疼きは起きなかった。それに、ただ深い安堵を覚える自分を知覚する。
「それにしても、多いわ」
　呼ばなくてもいいだろう遠方の貴族の名前まで連なっているのにはさすがに驚いた。三公や十八ある侯爵家に、伯爵家として主となる五伯はまだ分かる。だが遠方のローフェス伯爵や、外来貴族であるハーベルフィクス伯爵が呼ばれる理由はないはずだ。それによくよく見れば分かるが子爵家と、片手で数えられるほど少ないが男爵家までも呼ばれていた。叔母や義兄は気でも狂ったのだろうか。
「まさかウェンリーク子爵まで招かれるとは思っていませんでしたね……」
　子爵家の中で特に出世欲の高い男の名を上げながら、ウィルはわずかに顔を歪めた。切り捨てようにもサルサ老師さえ、この参列者全員に目を通し彼が太鼓判を押したのだ。次期国王がいくらいったところで決して切り捨ててはくれないだろう。
　そう、次期国王。
　私は晴れて明日、国王として国民から認められる。
　十九年。当たり前のように一瞬で過ぎ去るはずのその人生の極一部だけれど、酷く私にとっては長い期間だった。待ち望んでいた本当の最初が始まる。やっと被り続けた仮面の意味を見出せる。
　それほどまでに明日が来ることを望んでいながら、けれど私は同時に小さな不安を抱かずにはいられなかった。招待状を送った参列者の中には、他国と隣接する地方の領主も含まれている。もし彼らが騎士を連れてこちらに出向いたら、何が起こるかなどは一目瞭然だった。特に我が義兄ベアードの半分の母国であるトルスと隣接しているシエルタは、最近ますます治安の悪化が目立っており、どうしても緊張感が拭えなかった。今は肝の据わった貫禄のある男を領主としているが、彼は律儀な男だから恐らく即位式に出席しようとするだろう。そもそも新国王の登場なのだ。欠席するわけにもいかない。
　そこまで考えて、やはり叔母と義兄に参列者の選別を頼んだことをわずかながら後悔する。彼らもその事情は知ってはいるものの、それでも何十年もトルスの賊の侵入を食い止めていた男に何らかの褒美を与えたいと思う気持ちも分かる。さすがに男の名前を見たときはサルサ老師も眉をひそめたが、彼らと同じ結論に至ったのだろう、切り捨てることはしなかった。
「出世をしたければそれ相応の手柄を立てればよろしいのに」

ウィルの言葉に、ウェンリーク子爵の顔をおぼろげながら脳から引きずり出す。果たして彼と会ったことがあるのだろうか。
「そうもいかないわ」
イチェリナ皇国は他国と隣接する地域以外、どこも治安の悪化もなく穏やかで牧歌的日々が続いているのだ。それに彼のような男は戦いで成り上がるような人間ではなく、むしろ商業や経済面でのほうが見込みがあるといえるだろう。会ったこともないだろう男の経歴を見る限りでは。
「他国との市場を増やす、という叔母様の件は考える価値がありそうね」
丁度叔母から回ってきた書類には、そういったことについての忠告が書き連ねてあったはずだ。そう思いながらその資料を取ろうとするがあっさりとウィルの手に制され、彼はすぐにその資料を持ってきた。肩をすくめてしまう。
「優秀すぎるのも困りものね」
私のそっけないその一言に彼は嬉しそうにちょっとだけはにかんだ。少年のような仕草と大人びた顔は似合わないようで、だけれどよく似合ってもいる。
「ウェンリーク子爵にそれを任せるのですか」
「任せられるほどかどうかは叔母様と相談するわ。それと、彼」
シエルタを任せている領主の名前を見つけ、何となしにその名をなぞる。四十も過ぎた日の焼けた、見るからに屈強そうな男だった。褒美として何かを与えるとしたら、やはり爵位なのだろうか。彼は今男爵。位を上げるのが最も良い手段のように思うが、しかし。
「爵位を与えて、喜ぶような男ではないように思いますが……」
それが問題だった。彼は爵位を与えられて喜ぶような男ではないらしい。私自身男爵位の人間とはあまり話す機会がなく、よく知らないのだがウィルがいうそれは間違いないことを知っている。ウィルは一度この男と会ったことがあるからだ。
「爵位よりもシエルタ市街地に、やれ教会を作れだの、孤児院を作れだの言ってきそうな根の良すぎる方ですよ、彼は」
呆れたように言う彼の口調は、けれど男を慕うものだった。それもそうだろう。ウィルを救ったのはこの男なのだから。
「自分が爵位を得て、その増えた金額から教会を作るということにつながらないのが可笑しいわね」
「自分が持っていると使ってしまいそうだ、といっていた気がします。彼は大酒飲みですから」
「酒豪なの？」
「シエルタで開かれている酒豪のための大会、というふざけたものがあるらしいのですが、毎回優勝杯をいただいているそうです」
くすっと笑いを漏らした彼のその笑みに、心からの安堵を感じる。彼は、今こうやってあのときのことを言葉に出せるほど、回復したのだろう。そうだといい。そんな思いが沸き起こる。
「もう少し、彼のことは考えるわ。彼が領地に戻るのは五日後だったわね」
「はい」
明日の即位式を除いて四日。男爵である彼と直々に話す機会はできるだろうか。わずか

に危惧しつつ、それでもどうにかしようと心に決める。
そのとき丁度扉がノックされて、顔を上げる。時計を見ると会談の時間だった。
ウィルはちらりと手元のスケジュールを確認すると、私を見て目で問われる。私は適度に机の上を片付けると頷いた。
皇女として、最後の仕事が始まる。

2

夜。
翌朝の即位式のために、午後の仕事もあまり長々とはできなかったのだが、片付けられるものは全て片付けた。執務室でもう一度書類を見直した後、部屋を出る。ウィルは当然のように私の後に従った。
「お疲れ様です、殿下。これで本日の執務は終了です」
頷きながら廊下を歩く。人の気配がしない豪奢なそこは、うっすらと冷気が漂っていた。右手にはいつか少女達とお茶会をした庭が、夜を纏った空気とともにただ存在する。あれから三年。そう、三年も経ったのだ。
不意にカツン、という靴音が響いて、私ははっとして振り返る。離れたところにガレスが佇んでいた。その静かな立ち姿に一瞬誰か分からなくなる。
青い真っ直ぐな視線が突き刺さる。彼は迷うことなく私のほうへ近づいて、そして静かに跪いた。
「こんばんは、ガレス卿」
手を差し伸べながら静かに言葉をかけ、同時にウィルに下がっているように視線を送る。彼は一瞬不安げに眉をひそめ、しぶしぶと引き下がった。ガレスはウィルが下がったのにも気づかない様子で、私の手を取りそっと唇が指先に触れる。熱くてかさついているようだった。
「ご機嫌いかがですか、シャルロット殿下」
応えない。ただ黙って頷くと、彼は一度顔を上げてそれから深く頭を垂れた。
「お聞きしていただきたいことが、ございます」
遂に、来たのか。
漠然とそう思う。そっと彼の手が離れた。それに対して冷たい視線を送ることしかできないと、何度も態度で示したのに。なのに何故。何にも与えられない私を選ぶのだ。
否、与えることはできる。仮初めの地位、仮初めの権力ならば。どうせ一瞬で消えてしまうそれだから、私は誰にもそれを与えるつもりがなかった。
「シャルロット殿下。
貴殿のことをお慕いしております」
慕うは親愛、愛すは恋慕。
いつか父が呟いたその言葉が鮮明に脳裏に浮かぶ。父は誰を愛し誰を慕っていたのだろう。兄は、母は。故人となってしまった彼らを思い浮かべながら、私は頭を垂れる男を貫くような視線で射抜いた。
「それは、親愛ではない、と申すの」
強張った声になっていた。緊張感のある刺々しい声音に、男はびくりと肩を一瞬すくま

せる。哀れだった。私と彼では対等の場にすら立つことができない。こんなにも私と共に闘ってくれた存在なのに、私はそれに応えることもできないのだ。
「はい」
簡潔なその言葉にずきりと胸が疼く。ちらりと下がったはずのウィルを見ると、彼は険しい顔をして跪くガレスを睨みつけていた。そのわけの分からない表情を見て、また、喪われたはずの胸の痛みが再発する。
何故、忘れたはずなのに。
突然喉が絞まったような感触がして、呼吸が苦しくなりとっさに胸を押さえた。視界の片隅でウィルが顔色を変えたのが分かったが、首を振って制止する。静かに頭を垂れる男に気づかれないように、深く呼吸を繰り返した。
呼吸がゆっくりと整っていく。目を一度閉じて、また開く。男は何も言わずに私の言葉を待っていた。拒絶を受けると知りながら、何故あなたは私を待っているのだろう。
「私がまだの庶民の子であったとき、貴殿を遠いところで見ていました。届かない存在、届くはずのないところにいる人だと、そう」
低い声が地から上ってくるようだった。
彼はそういいながら、けれどその矛盾にも気づいている。届いてはいない。彼はまだ、私には届いていないのだ。
「でも今は。届いてはいないけれど、貴殿に声をかけられる。それだけで、私はとても幸せでした」
何故、それだけで満足できないのだろう。何故、それ以上を望んでしまうのだろう。哀れみによる痛みが胸を刺す。彼が私に向けられたいと願っている情でないにも関わらず、それは心中をひそかに浸した。
男はゆっくりとその頭を上げて、真っ直ぐに青を私に突き刺した。曇り気のない澄んだ瞳。この目を最期に見て喪われた命は、一体いくつ存在したのだろう。彼の青い瞳は、まるでこの国の青い空のようだ。愛しくて、決して手の届かない。
あなたは私に届かない。
でもそれは私にとっても一緒なのよ。
「そして、もっと強欲になった。貴殿に、触れたいと、願うようになりました」
「……そう」
言葉を喪ってしまう。あなたの優しい言葉に強烈な刃を振り下ろすことしかできないのに。なんて、哀れで愛しい。
そっと男の頬に触れる。ざらりとした肌は、いつも側にある美しい青年のそれや可愛らしい女のそれとは異なっていた。私と同じように、醜い血を見つめてきた男。闘ってこの地位にまで上り詰めた誇り高き男。
素直な賞賛が心を満たす。彼は、本当に強い。
だから。
手を振り上げて、静かにその頬を叩いた。沈黙した廊下にかすかな音が響き渡る。ガレスは半ば予想していたようにそれを甘受し、その長い睫を伏せていた。
「私の答えは、お分かりですね」
「……」

私は何者にも捕らわれてはいけない。何者にも絆されずただ凍りついて、もう二度と溶け出すことのないように。もう二度と、心が揺れ動かされることのないように。
「あなたの気持ちを、光栄に想います」
声が震えてしまった。
唇を一度きゅっと結び、それから男に背を向ける。ウィルが一瞬視界に入ったがそれすらも気にならなかった。付き従おうとするのを制して、そのまま部屋に向かう。
誰も、誰も触れないで。
扉を閉じて喉を押さえた。嫌な音がする。喉が誰かに掴まれたかのように苦しくなって呼吸が辛い。今はまだ、何もかもに蓋をして逃げてしまいたい。だから、だからどんな声にも想いにも。
「私は……」
答えられない。

3

「おはよう、シャルロット」
女性らしい艶やかな声に振り返ると、案の定満足そうに微笑むレティリアが立っていた。当然のごとく美しく着飾っているが、彼女の腹はわずかに膨らんでいた。そのどこか神聖な姿に一瞬息を呑む。新しい命を持つ人はこんなにも美しいものなのか。
「おはようございます、叔母様。……お子さんも、おはよう」
そういって叔母の腹に触れる。侍女が一度制そうとしたが叔母はそれを止め、やわらかに微笑んだ。この温かいお腹の中にいずれ自分と同じ立場になるものが、羊水に包まれて眠っている。それはとても不思議なもののような気がした。
「如何いたしましたか」
「見立てたドレスが似合っているか確認しにきたのよ。うん、問題ないわね。さすが私」
にっこりと彼女は笑って私の姿をじっくりと見つめた。
純白の髪を複雑に編み上げて、首筋には滴のような小粒の金剛石が連なり、白い肌を細やかに煌かせる。ゆったりとしたローブは王の証の静かな黄金に輝き、比類ないほどに優美だった。一片の穢れのない白のドレスとその白い全ての中で、深海の瞳が銀色の睫に縁取られ、触れることを拒絶するかのような潔癖さを感じる。
レティリアは内心そんな彼女の姿に舌を巻いていた。シャルロットというこの少女は、いつの間にか完璧に王としての威厳が体に根付いている。これほどまでに王に相応しい少女はいない。
「そう、でしょうか」
「私が言うのだから間違いないわよ。メアリ、準備は整ったの？」
レティリアの声にメアリはびくりと肩を動かし、そして手にしていた絹の手袋を恭しく私に差し出した。その眼差しは畏怖と。
私はそっと薄い笑みを口元に乗せた。それに気づいたメアリは驚いたように私の表情を凝視する。その目は何かを訴えているようで同時に何かを隠したがっているようにも見えた。それに気づかないふりをして、私はそうっと言葉を落とす。
「ありがとう、メアリ」

いつも喉の中で滞って言えない言葉を吐き出した。目の前の赤髪の侍女はその目を大きく見開いた。こぼれそうにその目が揺れ動く。
それを聞いていた叔母は何も言わずにうっそりと微笑んで、私を促した。
「行くわよ、シャルロット。あなたの国民が待っているわ」
そう、今日が、私の即位式だ。

即位式は城の中の大聖堂で行われる。広く常に手入れの施されているそこには、信じられないほどたくさんの人間が集まっていた。それをまだ見てもいないにも関わらず、扉一枚先から感じることができる。たくさんの人といっても、新王の誕生に立ち会えるのはどう足掻いたところで貴族階級の者か、聖職者のみだ。一般の人間は立ち入りが許可されておらず、護衛にあたる者も皆一様に貴族階級のものばかりだった。
扉を見る。この一枚先に、あれほどまでに望んだものがすぐ側に。
それに何らかの感慨を抱かなかったわけではない。むしろ巨大な感情の波が押し寄せて息苦しいほどだった。
だけれど、今は。
その押し寄せてきた強い感情は、漣のように静かだった。揺らぐことなくただ沈黙を守り、私の感情は凪いでいる。
ふ、と笑みが唇に浮かんだことを、私は気づかなかった。隣にいるウィルがわずかに身構えたのを感じただけで、何も気づかずに前を見据えていた。
深海の瞳は全てを貫くように、目の前に立ちはだかる白の扉を、否、その奥に立ち尽くしている人々を見つめているように、超越した眼差しをしていたから。
彼らは「私の国民」ではない。
シャルロット・フィオラ・イチェリナの愛すべき国民だ。
高らかにファンファーレが鳴り響き、私の夢想は打ち破られる。不意にくっと背後から袖を掴まれ、驚いて振り返るとウィルが縋るような難解な視線を私に送っていた。そっと唇に脆弱な笑みを浮かべ、頷く。大丈夫、大丈夫よ。
ウィルに、伝わったのだろうか。彼は口をきつく結んで、頷くとその手を放した。
巨大な白い扉が開かれて赤い絨毯と、微笑む人々が視界に入る。修道女に導かれるようにして、その道を進んだ。回りを見もせずに白銀の少女は、その鋭い氷のような眼差しを真っ直ぐに玉座に向ける。いつか父が、そして兄が座っていたその場所。栄華と頂点の証にして、すべてにおいて唯一の。
三年、否違う。もっと前からだ。私は兄が即位する以前よりあの場所の意味を理解していた。いずれ私が手に入れて、そして。
玉座の前に辿り着く。楽隊の奏でる音が止み、ゆっくりと痛いほどの沈黙を与え始めた。その中にこの国で王族の次に高い位にあるサルサ老師の声が、低く染み込むように響く。
王冠を授けるのは本来母がするものだった。代わりに私の前に立つのはレティリア。輝かしい黄金の王冠をその絹の手袋に包まれた手で彼女は恭しく捧げもち、私の顔を見て微笑んだ。何も言わない。
「レティリア嬢、新王に戴冠を」
サルサの声に彼女は頷き、私は静かに跪き頭を垂れる。そして、ゆっくりと乗せられる

重み。
これが、王の重み。
父が、兄が、そして遥か遡ればイエラという英雄が受け継いだ、命よりも大切なもの。大切で、そしてずっしりと重いそれ。
立つように言われ静かに立ち上がり、レティリアの瞳と合致する。強烈なまでに輝くその目の言わんとすることは理解していた。だからするりとそれから逃れるように、人々の方を振り返る。
立ち尽くす脆弱な人間達は、その深い深い深淵の海の視線に飲み込まれたように錯覚するほど、彼女の眼差しは強かった。たかがシェマの少女なのに、されどその瞳に宿る叡智は既に成熟しきった大人のもの。王冠を抱き毅然と立つ彼女の小さな肩は、けれどただ圧倒的な存在感を放ちそこにある。人を寄せ付けないほどに全てから超越した、そんな印象を受ける少女はそっと誓いの言葉を告げて、躊躇いもせずに玉座に座した。

誰もが息を呑む美しく硬質的な新王、シャルロット・フィオラ・イチェリナが、遂に誕生した。

不意に連絡口の扉が大きな音を立てて開かれて、どこからかの使者が入ってきて切羽詰った声を上げた。
「即位式の最中真に失礼いたします！　トルス帝国の賊がわが国のシエルタの市街地に入りました。領土の返還を求めて武器を持ち、住民を人質に市街地に立て篭もっています！」
一瞬にしてその場に緊張感が走った。危惧していたことが実現したことに新王はわずかに顔を歪め、けれど即座にきっとそちらに視線を向ける。強烈な視線に使者はびくりと体を大仰なまでに動かす。それほどまでに彼女の視線は強かった。
「賊は何名」
「詳細は分かりませんが十数名と見られます」
「ウィル、メアリ、セストの準備を。ガレス卿、アーネスト卿、クライド卿、ダスティン卿、来てくれますね」
そう矢継ぎ早に指示を下しながら彼女は、隣に立っていたレティリアに王冠を預けるとそのまま歩き出した。サルサ老師が驚き声を上げる。
「シャルロット嬢、そなたが行く必要はない。四卿で十分なはずじゃろう」
「いいえ」
強い声がその場にいる者の耳朶を打つ。誰もがその声に顔を上げた。そして迎え撃つようにして貫かれる、その瞳。
「いいえ。サルサ老師。私はもうシャルロット嬢ではございません。
イチェリナ皇国の女王として、このような愚行見逃すわけにはいきません。お解りですね」
強い、強い眼差しに呑まれない人間など、存在しないだろう。
女王は静かにその薄い唇に小さな笑みを乗せて、メアリから手渡された衣とウィルから差し出されたセストを受け取った。
「イエラ・イチェリナに誓う。

私こそ、彼女の冠名を担う者。
……サルサ老師、後はお任せしましたよ」
そう言い切るとうら若き女王は、迷うことなくその場を立ち去った。

4

「死者は」
「国民は刃向かった男が一人だけです」
「……そう」
女王の銀色の長い睫が伏せられる。それがわずかに揺れた気がした。彼女の真横に立つ従者はそれに気づいたが、悲しげに顔を歪めただけで何も言いはしない。
襲撃の知らせから早二日。女王は白銀の鎧セストを身につけて、戦場である市街地にその姿を現していた。激しい攻防戦が一時中断し、否応もないほどの緊張感が沸き起こったその瞬間。彼女はまるで天から舞い降りた女戦士、いつかの英雄のように突然光臨したという。人質となった市街地の住民だけではなく彼らを取り戻そうと闘っていた戦士たち、そしてトルスの賊までも、彼女のその姿に一度武器を取り落とした。
その、あまりにも輝かしい存在感。
その、放たれる強烈すぎる威圧感。
その、白銀の鎧は陽を照り返し、視線を奪われる。
けれど本人はそれをなんとも思っておらず、むしろそれでは駄目だ、と低い声を漏らす。それでは駄目なのだ。まだ足りない。私には、私が現れただけで逃げ出すほどの力が存在しない。
「その者以外の八百九十二人は無事、とそう考えていいのね」
「は」
「嘘でしょう」
使者の言葉を遮って天幕の中に入ってきた男は言う。その姿を見て私はわずかに安堵した。
「クライド卿。あなたは確かローインにいらっしゃったのでは？」
「我が君がお困りだと窺ったものですから、駆けつけた所存にございます」
彼はそう言いながらその場に跪いて、いつも通りの儀式を流すようにして行う。クライドが立ち上がるのを見つめながら、私はそれに答えこくりと頷いた。
「ええ。それで、嘘とはどういうことなのでしょう」
「そのままですよ。嘘、というより我が君のお耳に拝聴していただくことに罪悪感がある。違うか？」
尋ねられて使者はびく、と一度その肩を大げさなまでに動かした。予想していたことだがやはりその仕草に、落胆を覚えずにはいられない。希望を持たせておいて踏みにじるのは醜い。また、それを知りながら期待をするのも、同じことだ。
「申し訳、ございません」
「答えなさい。人質はどこに。そもそもトルスの賊はどこにいるのです。私は先日この地に足を踏み入れましたが丁度あの時以降、賊と見られる人間の姿を見ていない」
使者は深く頭を下げて搾り出すように声を上げた。

「賊は今、シエルタでは有力の貴族十一人を引き連れて、領主の館に引きこもっております。数人が重症を負い、無事だと思われるレイセルトよりの館にて看護を受けています。それ以外の庶民はみな、三々五々に……」
今にも泣き出しそうな引きつった声になっていた。考えるまでもなく、それは当然自分の家族や友人が不安だからだろう。使者は人質から逃れた者、また賊が選んだ者が王城へ寄越される。自然、自分の顔が歪むのが分かった。愚かだ。愚かなこと。
トルス。
我が義兄ベアードの半分の血。彼の半身。大陸連合組織フィントールから遠ざかりつつある帝国。何を企んでいるのか図らせないその藍色。高貴なる紫と藍を惜しげもなく曝し、この大陸を統べるのは誰か、とまるで問うかのような、旗。
思い起こせばシエルタに入ったあの日、はためいていたのは何色だ？　その色は、それは。
「……無礼な」
不意に目頭が熱くなる。怒りがどこからか湧き上がるのを知覚する。何故私は怒りを覚えているのだろう。そう冷ややかな声が呟いて、痛いほどの苦痛を混ぜた言葉が返す。
私の一部なのだ。
「ウィル」
横に言葉を発さずに黙す従者の名を呼ぶ。彼はその翡翠の瞳をこちらに向けて、一瞬言葉を忘れたように押し黙る。彼の瞳には、どんな私が映っているのだろう。鎧を身に纏ったただのシャルロット？　沈痛な顔をした幼い少女？　それとも、セストの威光を抱く険しい顔の英雄？
「あなたに数人兵士をつけます。逃げ出した住民を引き連れてレイセルトに向かいなさい。向こうに難民を受け入れるよう連絡をいれておきました」
「かしこまりました、陛下」
「クライド卿。あなたは、私と共に闘ってくれるのでしょう？」
「当然です、我が君」
すっと腰を折って男は礼をする。それを眺めながら、私は自分の中の何かが熱くなっていたことを知らない。私、という人間が、何に対して凍りついた心を溶かすことができるのかを、私は分かっていないのだ。
今、沸き起こるこの憎悪が何か、私には分からない。

夜が明ける。琥珀色の髪の従者は兵士を数人引き連れて空が白くなり始めた頃、静かに天幕から出て行った。その後姿を見つめた後、女王は寝る間も惜しんで戦いの準備をしていた兵士を振り返る。筆頭に跪くクライド卿、そして彼の部下たち、一般の兵士たち。
私が下す指示一つで、彼らはそのまま目覚めないかもしれない。
そうするわけにはいかない。誰一人として欠けることなくこの土地を守り抜く。それができるのは、私。
一度目を瞑る。そして静かに開き、出したことのない冷たい声が空気を貫いた。
「我が民よ。私が必ずあなたがたを救うと誓う。
共に、闘ってくれますね？」

シエルタ郊外にて、鬨の声が上がる。

そこに立つのは、光り輝く女神のようだった。

いつか、その戦場にいた者はそう語る。幼い孫に、夢でも見たかのように恭しい眼差しを向け。

シャルロット女王があの丘――あそこのほら、あの小さな丘があるだろう？――に現れたとき、私はどうしても、動くことができなかったんだよ。

どうしてかって？　それは、そうだね。

あまりにも神々しかった。彼女の存在だけが太陽に照らされて、天から授かった鎧セストが輝いて、その深層の海のような視線が土地をなだめるように見つめたんだよ。手に抱く名もない剣が翻って空に臨むように険しい瞳で、あの方はおっしゃった。

「トルスの賊よ。そなたたちに、何も知らぬ愚かなお前たちに、その紫紺の旗を掲げることは許されない。

その身をもって、我が英雄の怒りを受けるがいい」

あの泥まみれの鬱屈とした暗い戦場の中で、彼女が身に纏う白銀と白き刀身を振るうたびに、まるで迅雷が駆け抜けるようだった。圧倒的な、力。

きっと、あれこそを王、と、そう呼ぶのだろうね。

もう、今はどこにもいないけれど。

今はただ、「白き人」と、そう呼ばれているけれど……。

シャルロット・フィオラ・イチェリナは、間違いなく我らの王だったのだよ。

## 四章　ディキリアの棘

### 5

「メアリ」

名前を呼ぶ。いや、呼んだわけではないのだけれど、彼女はくるりと振り返って私を見た。穏やかな瞳と合致する。一瞬、その目に動揺が生れた気がした。何事もなかったかのように彼女は小首をかしげて尋ねる。

まだ、早いのでしょうね。

「いかがいたしましたか、陛下？」

無垢な瞳。何も知らないように、とそう生きてきたはずのその瞳。彼女は私の血を知っている。私が流した血や、私以外の者が流した血の意味を理解してそれでもなお、何も知らない瞳で純真なそれで何の衒いもなく見つめるのだ。

メアリエル・リザフォード。

中流貴族リザフォード家の次女として生を受け、王城に上がると同時に二つ目の名前を失い、皇女に仕えることが決まる。それは中流貴族であり同時に外来貴族でもあるリザフォード家ではありえないほどの大抜擢であり、一時は彼女も相当非難されたようだった。まだ何も知らない幼い頃、彼女が実際に暴力を振るわれていたところを覚えている。それが許せなくて切り捨てたことも。

「たかが成り上がりの中流貴族の娘なのに、何故あなたみたいな小娘が王城に上がることができたのかしらねえ」

「私の娘のほうが何倍も美しく優しい賢い子でしたのに……」
「あら私の娘のほうがまだまだ役に立てましたことよ。こんな赤い髪の小娘なんて物珍しいだけじゃないの」
「きっとほら、ご夫人が取り入ったのよ、あのシャルロット姫に」
「まあ、なんて狡賢いのでしょうねえ。姫様もこんなわけの分からない娘なんて必要ないでしょうに」
そう上から降ってくる言葉に彼女は答えることはなく、腕に大きな箱を捧げ持ったまま目を伏せていた。この苦行が終わるまで黙って耐えることに慣れている様子だった。
耐えさせていた、のだ。
「あら、ねえメアリエル。その腕に持っているものはなあに？　私たちに見せてちょうだいな」
びく、とその小さな肩が跳ね上がる。同じように私の心臓も跳ね上がった気がした。女たちのその声。悪意に満ちた恐ろしい声だ。そっと彼女たちの顔を柱から窺うと、白く塗りたてられた顔に醜悪な笑みが浮かんでいた。こんな顔を向けられていたのだ。
「申し訳ございません奥様。こちらは姫様のためのお召し物でございます。ご容赦願えますか」
怯えわずかに震えた声だった。けれど言葉遣いは確かに皇女付きの侍女としては相応しく、それが余計女たちには気に食わなかったようで一瞬その場に冷たい空気が流れる。次の瞬間彼女たちの眦が吊りあがった。
「中流貴族の娘が私にご容赦願えますか、ですって？　あなたごときの願いごとなんて、私たちには関係がないのですよ」
「ほら、その手を放しなさい。いつまでも薄汚い手で姫様のお召し物を掴んでらっしゃらないで、汚らわしい」
「早く寄越しなさいな。私が持っていって差し上げましょうねえ」
ねっとりとした甘い毒蛇のような声。それでもメアリは必死に奪われようとする箱を掴んでいた。不意にその彼女の赤髪がはねて少女は倒れこむ。メアリをその扇で殴った女はあらまあ、と眉をしかめて嘲笑った。
「やあねえ座り込んじゃって。汚らしいわ。早くどこかにいっておしまいなさい」
「お返しください。それは姫様のものです」
「まだ言うのかしら。汚い子」
言いながら女はもう一度扇を振り上げて、私はやっと声を上げる。
「どういうことか、お伺いしてもよろしいでしょうか。ローシェス侯爵夫人」
あまり、よく覚えていないけれど、確かウィルはその場にいなかったように思う。だから私が言葉を発するのに臆していたのだと今はそう思える。
「こ、これはこれはシャルロット様。ご機嫌いかがでございましょう」
「そんなことはどうでもよい。ローシェス侯爵夫人、アストル子爵夫人、フィルエル侯爵夫人。私の侍女に何か問題でもございますか？」
そういって私はメアリの腕を掴んで彼女を立ち上がらせた。何が悔しいのか分からなかったが、私はそのときただ悔しかったのだろう。彼女を馬鹿にされたこと、如いては私を馬鹿にされたこと。

黙りこくった女たちを見つめ、私はメアリを引き連れて歩き出した。
「あなたがたとはお話が合いそうにはありませんね」
それから何を言ったかは忘れてしまった。だがその件のおかげで、メアリエルという一人の少女の認識を改めることになった。
恐怖に屈さない少女。
それは私の憧れでもあり同時に目標であったから、彼女に対して私は尊敬を抱くようになった。二つ上の少女。年齢もその赤毛だってうらやましいと思ったことがある。酷い言い方をしてしまったけれど。
「メアリの赤髪は、いいわ」
「どうしてですか？　私はシャルロット様の白銀の髪のほうが美しいように思います」
「ううん、あなたの赤なら、血がついても分からないでしょう？」
言葉を失っていた。あのあとそれがどんなに酷い言葉だったかを思い、謝ろうと彼女を探したが見つからなかった覚えがある。翌日、服を着せてくれた彼女の目は真っ赤で、目元はぷっくりと腫れていた。そういう、つもりではなかった。でもそう思ったのもまた事実だったのだ。
彼女は強い。怯えることを知りながら、そのくせ決して折れないことも分かっている。自分の弱さを自覚した上でその選択をなした。私がどうこう言えることではないと知りながら、けれど醜悪にもその選択をやり直してと迫りたい。どうして選んだの、何故。
けれど私はそれをしない。そうすることを「氷の姫」は望んでいない。そんな無様な姿を誰にも曝すことは許されない。きっと、だから私のその自尊心ゆえに彼女はその選択をしたのだろう、と今ならはっきりと分かるのだろうけど。
けれどもう、遅い。
「陛下？」
困惑した声が聞こえて私はその眼差しを彼女に向けた。身をびくり、と震わせた彼女の瞳には、私はどのように映ったのだろう。向けられた視線は明らかに怯えをあらわしていた。それでもすっと胸を張って姿勢よく毅然と立つ姿は、美しい。
「何」
「ぼうっとなさっていますよ。もう本日の執務は終わったのでしょう？　そろそろお休みにならないと」
平然と返せる彼女に尊敬を覚える。だからす、と目を伏せてぽつり、呟くようにいった。
「ええ、そうね」

6

「殿下」
声に振り返るとウィルが立っていた。手には今日のスケジュールだろうか、冊子が握られている。少しだけ慌てているようだった。
「突然で申し訳ありません。本日のご予定なのですが少し変更を加えてもよろしいでしょうか」
「用件は」
「キャロライン様が、お会いしたいと」

何故このタイミングで彼女が？
困惑を隠さず彼の目を見つめる。けれど勿論ウィルに彼女の事情など分かるはずもなく、やはり少し困った表情をしていた。それもそうだろう、キャロラインはベアードの母、つまり私にとっての義母だ。親しくないどころかレティリア以上に犬猿している彼女が、何故今頃私との会談を望む？
ふ、と思い浮かぶのは赤い色。
執務室に向かおうとしていた足をくるりと方向転換させ、応接間の一つを思い浮かべる。そこはもともとトルス帝国の客人のために作られた部屋で、恐らくキャロラインが気に入っている場所だ。何度も彼女があの部屋でくつろいでいた話は耳にする。他国の曲がりなりにも嫁いできた王女が、平然とそこでくつろぐ様子は前々から噂されていた。何度も口うるさい淑女たちに進言されたのを思い出す。
どこだろうがここは確かに彼女の城でもある。たかが貴族ごときが忠告するのはおかしい。だが、彼女の処遇に困っていたのもまた事実だった。
義兄へと確かに受け継がれている美しい銀糸を揺らし、うっとりと酒にばかり浸っているようで、けれど彼女はイチェリナの城であるここでトルス出身の人間を掠め取る。ふわりとその美しい体躯で妖艶に、夢のような御伽噺を紡いでみせる。トルス帝国という国が見るべき夢を。
ある種の宗教のようなものだ、と誰かが言っていた。その言葉を呟いたのは誰だろう。
「彼女が使っている応接間を整えて。それとメアリを呼んで頂戴。時間は何時から」
「できるだけ早急に、と」
「今日会談予定の方々に、予定が変更したことをお伝えしておいて。私は着替えてからいきます」
「はい」
ウィルの返事をきちんと耳にとどめてから、私室に向かう。せめてきちんとした格好で臨みたかった。この国の王が誰なのか、ここに住まう人々は誰のものなのか。
「忘れられては、困るわ」
小さく呟く。それは広い廊下に静かにこだました。

ドレスを着替えて応接間の扉を開ける。案の定ふわ、と強い酒の香が漂ってきた。す、と視線をソファにくつろいだ様子で座る女に向けた。妖艶なその姿、蠱惑的な美しい瞳。醸し出される雰囲気すら義兄とよく似通っていた。けれど決して彼女や彼は醜悪ではない。
「よく来て下さいました、女王陛下。一口いかが？」
甘い蕩けるような声はそう呟いて、もう一つのグラスに黄金色の酒を注ぎいれるとこちらへと押した。真っ直ぐに座る彼女を見つめ、失礼ですが、と声を上げる。
「お義母様。酒より先に座っても？」
「これは失礼。あたくしばかり楽しんで申し訳ありませんわ」
すぐ近くに立っているメイドに座椅子を整えるよう指示し、それでもゆうらりと手に持つ扇を仰いだ。甘い匂い。義兄のそれとは違い酷くねっとりとしたそれは、あまり好きな香りとはいえない。同じトルスでも違うのだ。
座るよう促されそのまま抵抗なく座る。下らない手を使うはずもない彼女は、私のその

行為を見て嬉しそうに眦を垂らした。
「あなたは本当にあたくしを疑わないわね。可愛い子」
答えない。黙って彼女の紫の混じる藍色を見つめる。キャロラインはその様子に余計幸せそうに、目を細めた。まるで愛しい我が子を見つめるかのような視線に戸惑いを覚える。何故だろう、その視線はけれど笑いを含んでいるようで、薄気味悪く思う。いけない、この人は。
全てを失くす前に、彼女の全てを奪わなければ。
はっきりと危険が脳内で警鐘を鳴らしていた。やはりこの女は人とは違う。少なくともイチェリナの人間であるならば、その目を私に向けることができない。何故なら私は女王であり――、そうか。
この女は、私を女王として認めていない。
「ねえ女王陛下？　最近ベアードとは会いまして？　あの子どうやらまた低俗なお店に出入りしているみたいなの。あなたから言っていただけないかしら」
「お義母様からおっしゃったほうが、義兄様もお聞きになられると思いますが」
ふふ、と彼女は赤い唇で半月を描き、妖しい声を上げる。
「分かってらっしゃらないのね、女王陛下。あの子が唯一誰かの言葉を聞くとしたら、今はもうあなたしかいないのよ」
「ご冗談を。実母の忠告を無視するような方ではないでしょう」
嘘だ。彼はキャロラインのそんな小言には気を止めない。ロうるさく彼の行為をたしなめることができる存在は、今は亡きアルドレッドだけだ。私が言ったところでむしろそれは煽るだけだろう。それを知ってか知らずか彼女はにっこりと笑う。
「うふふ、信じたくないのでしょうね。あたくしもよ。でも、あの子の気持ちも分からないでもない」
言いながら彼女はふらりと立ち上がり、危なっかしい足取りでこちらへと近づいてきた。そのまま私の眼前に顔を近づけて、紫紺の混濁し歪んだ瞳を臆面もなく私に晒す。
それは、傍から見ればまるで口付けを交わしているような位置で。
「ねえ、シャルロットちゃん。あなたを堕とすには、どうすればいいのかしらねえ？」
「……下らない妄想はお仕舞いにしては」
「氷の姫。あなたを堕落した淫乱な娘にしてあげるわ。ふふふ、楽しみにしてなさい」
その短い誰にも聞こえないやりとりを終える寸前に、近くにいたメアリが悲鳴を上げた。
「ひっ、な、い、いやっ！　いやああ！！　汚らわしい！」
「な、お、奥様！？　お離れ下さい！　一体何を……」
「シャルロット様！　シャルロット様！」
「大丈夫よ、メアリ。触れていないわ」
簡潔に答える間にもキャロラインは、自分の侍女たちに連れて行かれていた。
「うふ、うふふふふ。ねえ、女王陛下？　今度は何時お会いいたしましょうか。赤が散ったとき？　それとも氷が堕ちたときかしら？」
答えない。彼女の高笑いを聞く耳と握り締めるメアリの指が、酷く痛んだ。

信じられない。信じたくない。
気持ち悪い、気持ち悪い。
あの白が藍に呑まれるだなんて。
気持ち悪い。
汚らわしい。
ずっと、ずっと嫌だった。
触れることを許したくなかったのに。
気持ち悪い。
「メアリ」
前方に毅然と立つ白髪の主人が振り返り、私の名前を呼んだ。真っ白い純白の美しい人。誰よりも美しく誰よりも穢れを知らない、そして歴代の王よりも血に触れた私の王。
私の、そう私の女王。
「はい、いかがいたしましたか？」
「応接間での準備を整えておいて」
応接間。
あの日、あの人が女王に穢れをつけようとしたところ。気持ち悪い。行きたくない。あそこは純白だったはずのあの人が汚された場所だ。思い出すだけであのときのどろりとした、濃厚な酒の香りが鼻腔をくすぐり気分が悪くなる。あの一瞬の交差。彼女たちの間に立ち上る、薄暗い空気。
嫌。いやだ。
「メアリ？」
怪訝そうに問われ、主人の深海の瞳がこちらを覗き込んでいた。返事を返していなかったことを思い出す。駄目だ、しっかりしなくちゃ。
だけど、口を開いても言葉は出てこなかった。顔が歪む。こんなところで拒否していても仕方がないのに。なのに、嫌悪の感情が沸き起こる。触れないで、私の王に。
触れないで。
「メアリ？　具合が悪いの」
問いかける声に首を振る。子供じゃないのだから答えなければ。違う、違います。それでも言葉は口を通らない。まるでせき止められたように、声を発することができない。どうして。
異常に気付いたのだろうか、ウィルが主人の声に振り向いて私を視界に捉え、表情を変えた。美しい人。二人が並んで立つ姿は本当にまるで幻想のように美しい。ウィルは手に持っていた書類を卓上に置くと、私のほうに近づいてきて同時に私は手で支えていたお盆を取り落とす。かしゃん、という音と共にティーカップやポットが砕け、床にその茶色をぶちまけた。それでも私は動けない。主人の深海の瞳から、探るような恐ろしい瞳から。
逃れられない。
「メアリ」
怖い。怖いの。
あなたのそのどこまでも美しい瞳は。
「メアリ」

もう一度彼女はいって、一歩私のほうへと足を踏み出した。す、と伸ばされる白い手。これが何度も他者の血やもしかしたら自分の血さえも、浴びていたことを思い出す。何故、何故そんなことを。

美しいまま、穢れなきままでいてほしかった。

お人形のように純粋無垢に、全てを信じた眼差しを私に送って欲しかった。なのに、何故剣を手に取ってしまったの。

「具合が悪いのね。座って」

そっと、まるで大切なものを扱うかのような手つきが、酷く怖い。私はそんなものじゃない。そんな大切に扱われるべき人間ではないのに、あなただってそれを知っているくせに。

だけれど主人のその優しい言葉に私はどうしようもなく、座り込む。顔色が悪いわ、と心配そうな顔をして、彼女は私の額に冷たい手を当てた。ひんやりとそれは私を侵食する。消えていきそうだ。あの、紫さえも、全部、全部。

「ウィル、紅茶を淹れて。他の子に応接間を整えるよう伝えてきなさい」

「かしこまりました、殿下」

そうぴたりと美しい角度で礼をしたウィルは、一度こちらをちらりと見ると複雑な顔をしたように思う。駄目なやつだ、と言いたいの？　それとも、あなたも。

「メアリ」

優しく冷たい声が耳を打つ。はっと顔を上げると、彼女は向かいのソファに腰掛けていた。優雅なその姿に、憎悪にも似た感情が沸き起こる。何故、何故。

「は、い」

「具合が悪かったら無理をしないで、といったはずよ」

冷たい声音。けれど私は知っている。彼女のこの口調は、感謝を述べようとしているものだ。長い間一緒にい続けた私と彼なら絶対に理解できる言葉。それでも、じわりと視界が滲む。泣いてはいけない、ここで泣いては間違ってしまう。それじゃいけないの、そうしてしまってはあの人に、あの人に怒られてしまう。

「はい、申し訳ありません」

「謝ってとは言ってない。休みなさい」

切り捨てるような声。いつもならそれはなんてことのない声なのに、今日だけは身に突き刺さるように聞こえる。違う、違うの、私はあなたを！

いっそいってしまえればいいものを。

いつまで待てばいいの、この狂おしい絶叫を。

いつになったらあなたに吐き出せると言うの。

「……っ」

行かないで、そんな醜女のような声が漏れ出しそうになって、必死に口を押さえる。行かないで、お願いどうか、どうか行かないで。その深海の瞳を私に向けて、切りつける様に言葉を投げて。

すっと立ち上がった彼女は、そのまま部屋を出ようとし、けれどゆっくりとこちらへと戻ってきた。それに深い安堵と愛しさがあふれ出し、涙が堪えようもなくこぼれ落ちる。やっと、気付いてもらえた、そのおかしな言葉が落ちるよりも早く、私はそこに立つのが

主人ではないことに気付く。甘い色合いの銀糸はずるりとだらしなく垂れ下がり、ふわりと香る濃厚な酒の匂い。ああ。
「キャロライン、様」
「こんにちは、メアリエル。随分と苦しそうねえ」
今にも笑い出しそうな口調で、彼女は凶悪なまでに微笑んだ。その目は怖い。毒の混じった紅茶を思わせる陰鬱な紫。でも、それでも彼女だけが。
「助けて……、お願い、です……。お助け、くださ、い」
苦しい、苦しいの。
主人の義母である、彼女。
イチェリナに住まうトルスの民の、心の拠り所。
そうトルスを愛する者は、彼女を慕い、こう呼ぶのだ。
「キャロライン、陛下……」

8

「不思議ね」
ぽつり、と言葉を漏らす。最近はずっと側にいた赤髪の少女はそこにはいない。いるのは私とウィルだけ。まだ何も知らなかった幼いあの頃のようだ。あの時は、まだメアリは私にもウィルにも馴染んでいなかった。
「何が、でしょう」
沈黙を続ける。
尋ね返すことなどなくとも、ウィルはその意味が分かるはずだから。
私室の中で、唯一の休憩時間を二人きりで過ごしていた。左側にある窓ガラスが強い音を立てて、風の強さと雨を示している。空は珍しくどんよりと曇り、冷たい雨を降らしていた。
ちら、と手の中に納まった数枚の資料を見る。あの時は何も気にせずに選んだことだったが、それが今になってこの結果を生み出した。もう少し私が賢かったなら。こんな身を引き裂かれるような痛みは起こりえなかった。
メアリ。
「トルスの民、だったのね」
知っていた。彼女がトルスの人間であることは知っていた。だが、私は高を括っていた。彼女が裏切るはずがないと。あんなにも長い間一緒にいたのだから、私を裏切れるはずがないと。
ばかばかしい。何故そんな幻想を。
夢を見るのはあの女だけで十分だ。私は白い剣を手に現実を生き抜く。夢を見たければ一人で落ちていけばいい。できれば誰も巻き込むことなく一人で。道連れなんて、お前には必要がないだろうに。
それも弱い切望だ。それくらい分かっている。それを選んだのは彼女なのだから、私は何も口を出すことができない。分かっている、分かっている。口惜しいくらいに、理解していた。
「愚かなのは、私よ」

「そんなことは」
首を振る。今何を言われてもそれは間違いようもなく嘘だ。
人は変わる。
誰しも必ず変わっていく。それは兄が亡くなったときにもう嫌というほど分かっていたはずなのに。不変など、存在しえないことを理解していたはずなのに。
私はまた同じ過ちを繰り返してしまったのだ。
「……終わりに、しなければいけない」
ぽろ、と言葉は自然に転がり落ちた。そう、どうせやるのなら印象深く、私という人格を誰しもが一瞬疑うように。私の底に根を張る狂気をちらとだけ、垣間見せる機会だ。
「……っ」
ずきり、と不意に胸がつかまれたように痛む。呼吸が不規則になったのが分かる。駄目だ、このまま死ぬのは許さない。何も成し得ぬまま死するのは、絶対に許されない。
ウィルは私の異変に気づくと、すぐに駆け寄って私を抱き上げた。そのまま寝室の寝台にそっと乗せてくれる。その間にも痛みは心臓を中心に広がっていくようだった。千切れそうな激痛に言葉もなく歯を食いしばる。そっと冷たい布が額に置かれ、大きな手が私のそれを強く握った。そんなことはしなくていい、そう言いたくても今口をあけると悲鳴を上げてしまいそうだった。必死に堪えながら、痛みが消えていくのを待つ。
死に神は、いつまでも待っている。
私が「氷の姫」という人格から崩れ落ちるのを、今か今かと待ち構えているのだ。もうあまり時間は、ない。
最初の発作が起きたのは何時だろう。もうずっと昔のことだったと思う。兄が重い病に臥せたときだろうか。あの時も私は今のようにウィルに手を握られていた。今よりずっと私たちは泣き出しそうで。死ぬことを怯えられるほど、幼かった。だけど今はどうだ。私たちは、私だけでなくウィルさえも、死ぬことに恐怖を覚えていない。あんなにも怯えたそれは、今はただ最も不愉快なものでしかありえなかった。近づかれても怯えていただけだったあの頃とは違い、それを切り捨てようと威嚇する私たちは、なんて愚かなんだろう。
うとうとと、まどろんでいたようで、ウィルの手が離れたことに気がついて身を起こす。もう痛みは治まっていた。前回注射を打ったばかりにも関わらず発作が起きた。あと何年、何ヶ月でこの命は尽きるのだろう。
それまでに、やらねばならない。
「シャルロット様、これを」
差し出されたコップには冷え切った水が入っていた。こくりとそれを飲み込んで、小さく咳をする。ずきり、と心臓が痛んだが、それを顔に出さないように努めた。今は自分の身よりも彼女のことを気にかけたい。
いつ、いつだろう。
そう思いながら、けれどどこかで私は答えに気付いているのだ。胸騒ぎがじわじわと焦らせる。終わりはすぐそこに。もう本当に目の前に迫っているようだ。
いつか、いつか見たあの赤い夢。
それが現実に訪れるのは、きっと嵐のような雨の日だろう。
ぶちまけられた赤を拭い去るような、強い、強い雨の日。

扉が控えめにノックされた。寝室から移動しながら返答する。
「誰」
「フォルスター男爵の侍女です」
「開けなさい」
「は」
扉が開き、黒髪の少女が入ってきた。深く一礼をした上で、静かに言葉を放つ。その目にはやはりこらえようのない怯えが浮かんでいた。王族に対する、恐怖。私は気に入られないのではないだろうか、そんな卑屈な恐怖。
メアリにはなかったもの。
私のたった一言で彼らは自分の命が喪われると信じている。そんなことができるはずもないのに。もはや自分の一部となった民を、無作為に傷つけることなどできようもないのに。
否、私にはそれができるのだろうけれど。
「お休みのところを申し訳ございません。明日お茶会を催すので、もしお疲れでなければいらっしゃいませんか、と。キャロライン様もお越しくださるようです」
やはり。
そう、ずっと感じていた。もしそれが、決定的な瞬間が来るならば、明日しかないと。
目を閉じる。ゆらりと陽炎のように思い浮かべたのは銀糸の女と赤髪の少女。トルス。
義兄に深い哀れみを抱く。
あなたは、きっと苦しい。

9

打ち付けるような雨は続いていた。廊下は湿気のせいか、余計音が響かなくなっていた。そこをウィルを伴って歩く。メアリはいない。昨晩から姿を消していた。
どこにいるかなんて、考えなくても分かるのだけれど。
「ようこそいらっしゃいました、シャルロット陛下。ご機嫌いかがでしょう」
フォルスター男爵夫人と数人のお茶会は、城内で雨の日でも使える綺麗な部屋が選ばれていた。唯一ここだけが雨でも光が入る。誰もが使いたい場所だろうが、ここの建設を手伝ってくれたのが当の男爵だったから彼ら男爵家はここにおいては優先されていた。
おっとりと笑い深く礼をする彼女に対して、軽く頷きながら勧められるまま椅子に腰を下ろす。事実、この淑女は側にいると安心できる。勿論、それは計算しつくされて生れたものだと分かっている。
「また素敵なお話を思いついたのですか」
そう問うと、彼女はそのわずかに老いた白い頬をほんのりと赤らめる。少女のような反応だった。
「素敵だなんてとんでもございません。あれを楽しんでくださるのは、陛下とキャロライン様とここにいらっしゃる方だけですもの。夫はあまり世俗なことをしないでくれとお小言ばかり。どちらが妻か分からなくなってしまいますわ」
フォルスター男爵夫人は王都で噂になっている、とある有名な劇作家でもあった。本名を晒していないうえ、物語の構成も単純明快で分かりやすくやや俗物的なものではあるが、

その中にどことなく教養を垣間見せるあたり、世間が彼女を本人であると認識できていないのである。
　困ったわ、と言いながらゆうらりと手にもつ扇を仰ぐ。数人周りを取り囲む他の貴婦人たちは、私とフォルスター男爵夫人を同時にちらちらと見つめていた。どちらを敬えばいいのか分からないようだ。主催者が私ならば問題ないのだろうが、今回は彼女だ。私は客だ、と示すように彼女に話を振る。面倒ごとはあまり増やしたくはない。
「本当に。今度はどのようなお話なのか、是非お聞かせ願えませんか」
「そうですわ、私たちも是非拝聴したいと思っております」
「前作の『花人』、とても美しゅうございました。あれは、もしかして、ハーベルフィクス嬢をモデルにしていらっしゃるのかしら？」
　『花人』、か。こっそりとウィルとメアリを伴い、見物したことを思い出した。
　塔に捕らわれ甘い香りの漂うたくさんの花の中で、一人の少女はいつもやってくる異国の国の少年と語り合う。外はどんな世界なの？　そこには何が待っているのかしら？　無邪気な少女の問いかけに、けれど少年は曖昧に笑って彼女が喜びそうな物語を話して聞かせる。本当は、少年は異国の国の王子で、その少女は他国の国の巫女だった。二人は決して会ってはいけない、更にいえば惹かれてはいけない二人だったのだが、逢瀬を重ねるたびに二人の愛情は募っていく。それでも遂に少年の国が、彼女の住む国へ進撃を仕掛け、少年は戦乱の中少女と一度も会うことなく倒れる。死すまでのわずかな時間、少年は少女の纏う花の香に気付きそっと目を開けると、少女の腕の中。二人はそっと口付けを交わし、掻き消えるようにその場からいなくなってしまった。
　実際にキャシャラ国からやってきた外来貴族ハーベルフィクスは、その一人娘である麗しい少女を塔の中に住まわせているという。そしてイチェリナ皇国の左翼であるユーフェスニア公爵嫡子は、彼女を慕い毎日飽きずにやって来ていると聞いた。確かにあまりそれは好ましいこととはいえない。イチェリナ皇国の左翼が外来貴族、キャシャラ国と通じてしまうのは得策とは思えない。それも、二人の感情しだいなのだろうが。ユーフェスニア公爵嫡子を慕うもう一人の少女を脳裏に浮かべながら、確かにあのお話は素晴らしい出来だったと思い起こす。
　一緒に見ることができたメアリは最後のシーンで、隠しようもなくぼろぼろと涙をこぼしていた。ウィルに窘められても、彼女の目から流れるものは止まらず、思わず呆れてしまいながら私は彼女に白いハンカチを貸したのだった。そんなどうでもいいことを思い出した自分を恥じる。
『『花人』は、本当は明志国の言葉の佳人、という言葉だったのよ。花のように美しい人、という意味なの。素晴らしい名前の付け方ね、フォルスター男爵夫人」
　そう、甘やかな声が落ちて、はっとする。彼女は他の者たちから離れたところでゆったりと腰を据えていた。目が合って、女はうっそりと微笑む。その隣で赤髪の侍女が救いを求めるような目を私に向けていた。それは今にも泣き出しそうで。
「ええ、そうですわ。博識なキャロライン様はすぐにお分かりになられたのですね。嬉しゅうございますわ」
　貴婦人はそこに嫌味の欠片も残さずに、本当に嬉しそうに微笑んだ。『花人』ご覧になってくださいましたか、と問うと、彼女は立ち上がりこちらへと寄ってきた。空席に腰を下

ろし、フォルスター男爵夫人手ずから淹れた紅茶を嬉しそうにいただく。移ろいやすい女は、まるで猫のようだった。
「ええ、見物させていただいたわ。とても素晴らしい出来ね。私はとっても好きよ」
「私もそう思いました。次の作品はもう考えていらっしゃるのですか」
同意しながら夫人に尋ねると、まわりが一瞬ひときわ強く私を見つめたのを感じる。キャロラインに同意した。それくらいのこと、よくあることだ。誰もが気に入った作品を私たちが気に入らないわけがない。それも分かっているキャロラインは、強い視線を私に送りつけたあとこくり、と紅茶を口に含んだ。
「根本たるものがないので、どうしてもまだお話する気になれなかったのですけれど……」
「是非窺いたいですわ」
「私も」
たくさんの声を上げられて、彼女は嬉しそうにその眉を困らせた。
「ありがとうございますわ、皆様。そういわれるとやはりお答えしないわけにはいかないですわね。
次のお話は、三つ目の子供のお話になりますわ」
三つ目。
びく、と私は思わず肩を動かした。彼女たちはそれに気付かぬようで、楽しそうにその目をフォルスター男爵夫人に向ける。ちら、とキャロラインを見ると、彼女はふわりと妖艶に笑う。そのつもりだったのか。
「三つ目？　ですか」
「ええ。女王陛下もご存知でしょう。狂王により人生を狂わされた幼い赤子。生れたかすらも定かではないその子のお話を、物語ってみたいのです。勿論、史実ですら存在が分かっていないのですから、全ては偽りなのですけれど」
偽りという言葉にほっとする。そうだ、あれを知る者はごく小数。
「大変興味深いですわね」
「続きを聞かせてくださいな」
「それは、またの機会でよろしいでしょうか。折角紅茶と美味しいお菓子を用意したのですもの、楽しんでいただきたいですわ」
その言葉を機に集まった女たちは己の会話に花を咲かせ始めた。その動きを見守ったあと、ウィルに合図して一旦部屋を辞した。メアリの縋るような視線が背中を追うのが分かる。
やめて、そんな目で見ないで。
だってそうでしょう。
裏切ったのは、あなた。

## 10

雨は、飽きることなく降っていた。
しばらく中庭で待とうとするとウィルに無理矢理引き戻された。
「いいでしょう、どうせすぐに終わるわ」
「いけません。あなたに倒れられたら困ります」
呆れるほど過保護な言葉に、返せない。分かったわと呟いて、使うだろう物を持ってき

たのかを目で問う。彼はこくりと頷いた。彼の翠には、どんな思いが込められているのだろう。
　長かった。
その言葉が落ちる前に、メアリが現れた。今にも泣き出しそうな表情で、その目の周りはすでに赤く腫れている。まるで泣きはらしたかのように。
「シャルロット、様」
　答えない。ただ黙って問うように彼女を見た。何故私を裏切るの、何故こんな真似を。そう問いたくても問えない言葉を一心に彼女に向けて。それでも彼女はその視線を、違うものと捕らえたかったようで、ヒステリックな声を上げた。
「違います、シャルロット様！　私は、キャロライン様に言われて、あなたをお守りするようにって、だから、違う、違います。私は、あなたを裏切ってない！」
　ああ、やっぱり。やっぱりそうなのね。
　甲高い声が突き抜ける。足ががくがくと震えた。何が怖いのかすら分からない、それでも恐怖がじわりと足を震わせる。無理矢理に足を動かして、一歩彼女に近づいた。雨が吹き込む中庭に足を踏み入れることになる。避けようもなく雨は体を打ちつけた。
喜びと恐怖と愛情と全てがない交ぜになったような表情を浮かべ、メアリは泣き出しそうに首を振る。駄目、駄目と壊れそうな声で。
「お願い、お願いです、シャルロット様、私は、私は、あなたを」
「裏切りたくなかった」
　ぽつり、と呟いた。顔を上げる。叩きつけるような雨の音が心地良い。愕然とした少女の顔を見て、全てが頭から遠のいていく。
　メアリ。
「ち、違います、わ、たしは私は裏切ってなどいません！　全部、全部あなたのために、消えてしまいそうなあなたを引き止めるために、そうするために、私は！」
　それは肯定の言葉であると誰かに教えられなかったのだろうか。憐憫にも似た思いを抱きながら、けれど私の表情は変わらない。無機質にただ人形のように。精巧な麗しい作り物のように。そうでなければ、そうでなければなんだというのだろう。
　この沸き起こる感情は。
「私は、あなたを失いたくなかった！
　あの幼い日のロッティという少女を誰からも、何からも奪われたくなかった！　なのにあなたは、血に塗れて平然とする氷のようになってしまった。なぜ、……何故！」
　激昂した声は詰っているようで。
　何故変わってしまったの、何故そんなものになってしまったの、何故あなたが。なぜ。
　湧き上がる疑問をそのままに、目の前の赤い髪の少女は、泣き出しながら叫ぶ。どうして。
「あんなにも愛らしいあなたは、どこにいってしまったの！？　どうしてあんなにも怯えた血を好んで浴びるようになったの！？
　何故あの人のために剣を握ったの、どうして、どうしてそいつのためなんかにっ！」
　ぎろり、とその目がウィルを射抜く。口汚い言葉や罵詈雑言に彼は一切動じることなく、彼女を見つめ返した。それが余計彼女の逆鱗に触れたようで、醜く顔を歪ませる。雨に濡

れた赤い髪を止めていた紐が取れて、長いそれははばさりと落ちる。綺麗な赤。狂おしいまでに赤いそれ。
「あなたはあのままでよかった！　誰にも触れられることなく終わってしまってよかった！　あの人だって、いえ、アルドレッド様だってそれを望んだことなどなかった！」
兄様。
違う。私は兄様が望んでいないことを知っていた。あの優しい兄が、私が血に染まるのを許すことなどないのを知っていた。それでもそれを聞けないフリをした。騙されることを望み彼はそれを受け入れてくれた。私が泣いて縋ったあの日から、兄様は騙され続けることを受け入れてくれたのだ。
けれど、そんなことを彼女にいっても分かりはしない。
「なぜ、穢れる道を望んでしまったの！？　あなたは絶対にそうならないと信じていたのに！　どうして、どうして！」
これ以上聞いていることはできなかった。また一歩、彼女に足を近づける。メアリは逃げることなどできずに、大声で割れそうな悲鳴を上げた。半狂乱になってまで私を望むのは、ねえ。
どうして。
ドレスの裾から剣を取り出す。雨に打たれても錆びることなく白く輝き続ける刀身。幾人もの人の血を吸った私の心。
それを向けられたときの彼女の顔を、私は一生忘れられないだろう。
「シャルロット、様」
それはまるで。
愛しいものがそこにあったかのような。
表情。
けれどそれは私の手や顔に彼女の血が付いた途端、崩れるように消え去って、残ったのは。
憎悪を滾らせた醜い表情だった。
「な、ぜ。何故私が、私が愛した、あの子じゃ、ないのっ、どうし、て！　どうして穢れようとするのよ！　何でどうして！」
「メアリ」
彼女を切り捨てた剣を放り出して、そのまま血まみれの少女を抱きしめる。赤い、赤いそれは、彼女の髪かしら、それとも。
嫌、といいたげに腕を強い力で掴まれ、引き離されそうになる。それでも強く抱きしめると、彼女はずるりと不意に腕の中で力を失った。
「触れ、ないで、さわらないで、穢れたあなたは、あなたじゃ、ない！　あんたなんて、死んでしまえ、死んで、死んでキャロライン陛下、に飲み込まれろ！　あの方はこんなにっ、穢れたりなんて！　しない、しない人なのよ！」
口からごぼり、という嫌な音と共に血が流れる。だけれど彼女はそれすら目に入らないまま、私を見て悲鳴を上げた。
「いや、いやあああ！　あんたなんて、昔から、昔から大嫌いだった……！　死んでしまえって何度も何度も！　気持ち悪いのよ！　あんたなんか、あんた、なんか！　死ぬしか

道がない、ただの死に損ないじゃない、なん、で、なんであんたが！」
　虚ろな目は何を見ているの。そう問いたくても、彼女の赤い色に言葉は阻まれる。力すら残っていないその拳を無理矢理、振り上げて殴る。彼女の吐き出す呪詛に縛り付けられたように動けない。
「あん、たが、死ねば、いいのよ！　キャロラインへい、か、たすけ、助け、て。はなし、なさ、いよ、私はあの人の、もとで……そうじゃない、と」
　ぶつぶつともはや言葉ですらないそれは落ち続ける。
目が合った。
　引き寄せた剣を振り上げた。
「おやすみなさい、メアリエル」

１１

「御機嫌ようシャルロット殿下」
軽やかな鈴を転がすような声が背後からして、私は緩慢な動きのまま振り返る。あの当時から三年が経過した今、マリエッタという少女はなおも美しく輝かんばかりに成長していた。その彼女が何故ここにいるのだろう。上手く働かない頭がそう呟く。
　もう、レティリアには伝わったのだろうか、先ほどの狂気のような騒動は。
　大勢の人が悲鳴をようやっと聞きつけたのは、私が彼女を斬れ伏せた瞬間だった。どうしても手から離れない彼女を、ウィルがどうにかして引き剥がし、人目を避けるように私室に戻り汚れた服を取り払ったところだ。いつもの着なれた紺色のドレスが、何よりも安息を与えている。これを着付けたのはあの少女ではないのに。鈍い痛みが胸を圧迫する。
「また一人あなたを慕う者を喪ったのですね」
揶揄を含めた暗い仄かに香る甘い声。女らしい甘さと艶を帯びる彼女を、私は静かにねめつける。堪えようのない喪失感を抱く私を知りながら、けれど彼女は甘やかに毒の混じった笑みを浮かべた。
　ウィルはその言葉にす、と私に寄り添った。彼はどんな表情で彼女を睨みつけているのだろう。触れそうで決して触れることのない距離のまま、ただその存在感を確認する。せめて、せめてあなただけは。
　けれどその想いすら、私は否定しなければいけない。
　彼女の言葉はそれを的確に指していた。
「ねえシャルロット殿下。このままだときっとあなたの従者もまた喪われてしまいますわ。だから彼を私に下さらない」
　呼吸は未だ苦しいままだ。
　彼女を斬り捨てた瞬間から、それは止まることなく続いている。どこかで何かが流れ落ちる音、何かが誰かが、生まれることなく死んでいく音。
意味を理解するのに対して時間は掛からなかった。その従者は彼女が言葉を放つと同時に顔を跳ね上げる。まるで仇敵にでもあったかのような反応は、酷く愚かしい。
そう、愚か。
私があなたを愛したところで、あなたはけれど私を愛してはくれないでしょう。
そんなことはずっと昔から知っていた。私の愚かな恋慕を私自身が気付かないわけがない

のだから。
「お好きなように」
紡がれた言葉。それは紛れもなく私の言葉。
「桃」と呼ばれる麗しい少女は、けれどその言葉に醜く顔を歪めた。何故あなたが顔を歪めるの。顔を歪めるべきは、そう、もう存在すらしない私の兄や、父や母。愚かな私を責めるのは、彼らでなければいけない。そんな他愛もない言葉を心中に呟きながら、けれど私は静かに彼女を見つめた。
隣にいる彼は凍り付いているようだった。あなたに私は必要ないのだから、あなたが気にする必要はないでしょう。そう、愚かな想いを抱いていたのは私なのだから。
　そうあなたではない。あなたではないから、何の問題もない。私が一人朽ち果てればそれだけで。
「殿下、あなたは愚かですわ」
マリエッタは辛辣に吐き捨てた。いつ如何なる時も愛らしい彼女が放つ言葉にしては、それは酷く下劣で不釣り合いだった。甘い少女のような顔が怒りか頬が紅潮し、こんなときであるにも関わらずに私はそれを美しいと思う。何故だろう、何かが離れていくようだ。それが分からないまま、私は彼女を静かに見据える。
「あなたには見損ないました。貴殿こそが祖国を真に愛せる王だと信じておりましたのに、所詮あなたごとき氷には祖国など存在すらしない塵に同じなのですね」
放たれた言葉は、けれど私には何の痛みにもならなかった。私は喪われるのだから痛みを感じる筈がない。脳裏にはあの赤く可愛いらしい私の侍女が手の中で事切れた瞬間が浮かんでいた。身体を見下ろさなくても分かる。私の身体は赤に塗れていること。この手で触れるなら、それはもう穢れてしまう。もう駄目になってしまう。
　一度目を伏せ、彼女をそっと見つめた。何かが壊れたように疲れていた。もう誰の気配もしない夜に包まれて、氷のように眠りについてしまいたい。誰からも触れられることなく、一人でそのままいなくなってしまいたい。
「ええ。あなたは分かっているのでしょう。ウィル、行きなさい」
　もう誰も要らない。
　あとは、あの人を道連れに朽ち果てるだけ。
　言葉もなく黙りこくる二人を置いて、私はその場を立ち去った。

「あれが、あれがシャルロット陛下だというの……」
　少女の声が廊下に響く。呆然と、信じられないものを聞いたと言いたげな彼女は、隣に音もなく立ち尽くす女王の従者を見る。
彼はその身をまるで冷たく硬い氷柱に刺し貫かれたように、顔を歪めて立っていた。居場所を強制的に奪われた哀れな子どもさながらに、青年は最も愛する人が去っていった方向を泣き出しそうな表情で見つめている。泣き叫ぶような声が聞こえてくるようだ。
「どうして。何故あなたがいながら、あの方はああなってしまわれたの。あなたはこの間何をしていたっていうの！？」
　少女の怒声が立ち尽くす従者に叩きつけられる。その言葉にウィルヘルムは少女をすと見やる。冷たい眼差しだった。それを平然と受け入れながらマリエッタは口惜しそうに

唇を噛み締める。
彼女が他者を愛せないようなら、それは困るのだ。
王は国の指針、もしそれが何をも愛せない冷血な人間ならば、それはそのままこの国を示すことになる。勿論彼女だってそれは分かっているだろう。だが、何故。
それは勿論仕方のないことだ、とも分かる。なぜなら今マリエッタの隣に立つ青年は従者だ。身分違いも甚だしい。それでもガレス卿に求愛されたのは誰もが知っている。だけれど彼女は、私たちの国王は。
「人を、愛せないというの」
言葉が漏れる。そんなことが、そんなことがありえるのだろうか。理解できない感情をそのままに立ちすくむ。何故、何故こんなことに。
けれど青年はその言葉に、こちらを強い眼差しのまま振り返る。
「ありえません」
「あなたにそれが理解できて？」
「はい」
「馬鹿なことを」
そう貶す言葉を吐き出そうとしたが、彼の行動によってそれは阻まれる。その身を翻し歩き出したからだ。
「な、どこに行くつもり？」
「陛下の明日の予定を確認してまいります。マリエッタ様に私など不要でしょう」
「それをいうなら陛下にあんたなど必要ないでしょう」
「いいえ」
強い口調と、その触れたら斬れてしまいそうなほどに鋭い視線に、ぞくりとする。振り向いた青年はまっすぐにマリエッタの目を捉えた。
「いいえ。シャルロット様を支えることができるのは、私だけです。誰にも、誰にもそれを渡すことはいたしません」
強い、力強いその言葉。
確信に満ちたその声を、何故彼女に告げないのだろう。
「……馬鹿者！　それを今すぐ伝えにいきなさい！」
吐き捨てる。分かっているくせに言わせるのだろうか。
青年は不意に一瞬、泣き出しそうに顔を歪めたあと、弱弱しく笑った。はい、と頷いて、その身を翻す。
去っていく足音を静かに聴きながら、桃の少女はほう、と嘆息をもらす。知性を備えた彼女だが、けれど彼らの考えは理解できやしないだろう。
彼ら王族の考える、最も崇高なる手段なぞ。
何故、女王が誰をも欲さないのか。
何故、それが義務なのか。
王族でなければ分かりやしないのだ。

巨大な城に雪はしんしんと降り積もる。中庭に入り込む灰色の雪が、そのまま廊下に立つ女のドレスを濡らす。霜が降りたような重い銀色の睫を瞬かせ、ふわり、と白い水蒸気がまるで夢のように空へと昇った。
「シャルロット様」
「なに」
名前を呼ばれてようやく振り返る。そこにいるのは彼女のあまりの薄着に本気で心配し、唯一言うことを聞かせられる一人の従者だった。持っていた柔らかなローブを羽織らせる。
「風邪を引かれてしまいます」
澄んだ深海の瞳は凍てついた冬のような眼差しを、彼に向けた。この目が自分の罪を許し、そして笑うことができるようになるには、どれほどの時間が必要なのだろう。
不意に彼女はそっとその視線を落とした。もはや病的といっていいほどに青白くなった肌に、霜焼けでも起こしたのだろうか頬と鼻だけが赤い。瞼が伏せられて、白い肌に灰色の影を落とした。
「執務は終わったわね」
「え？」
彼女の言葉の意味が分からずにウィルヘルムが尋ね返すと、女王は目を合わせた。人を畏怖させるほど美しい、氷の人。
「もうあなたの仕事は終わった。私にかまわなくていいわ」
言葉はまるで鋼のように、彼を打つ。それを望んでいるからと分かっているからこそ、従者の青年は言葉が聞こえなかったようにして彼女の冷え切った両手を掴んだ。それはこの主従にだけ許された行為であり、他の貴族では在り得ないことだった。
「……ウィル」
嗜める言葉を無視して、青年はその大きな手で彼女の冷たい手を覆う。びく、と引こうとするのを押しとどめ、温かくなるようにと撫ぜる。
「こんなに冷えて……。お体を大切にしてください」
女王は答えず、心がここにないかのように、少しだけ顔を歪めた。
こぼれ落ちる、吐息。
「……戻りましょう」
従者の言葉のままに、彼女は彼とその場を立ち去った。
雪はしんしんと降り積もる。すべての音を吸い込むように、静かにしっとりと。

「夜会？」
尋ね返す言葉ははっきりとその意図がつかめずにいるようだった。日程を調整した従者も、やはり少しだけ不服そうな顔をしている。彼女とは少し意味が異なったそれではあるが。
「そうだよ、シャルロット。君ももうシェマになったのだから、そろそろそういった場に出て、愛人なんてものを作ってみてはどうだい？」
シャルロットの義兄である彼の言葉に、はっきりと不快を示したのはやはりウィルヘルムだった。良い顔などするはずもなく、けれど不躾にならない程度に言葉をごまかせて返す。

「そういったことをあからさまに口にするのは、どうかと思いますが」
「ウィル、これも女王の執務の一つだよ。君が口を出す内容ではない。
どうだいシャルロット。夜会といっても仮面舞踏会だ。ただ仮面をつけて素性を隠し、踊り明かすだけの簡単な遊びさ。もし君が行くというなら、僕が僭越ながらエスコートさせてもらうよ」
イチェリナ皇国で行われる夜会には様々な種類が存在する。ベアードが名前を挙げた仮面をつけて行う舞踏会、主催者と暗黙の了承をした者だけが入れる舞踏会、オカルトそのものに儀式を行うために招かれる舞踏会。この雪深い冬の時期に行われる夜会は、特に仮面舞踏会が最も多かった。長い冬を精一杯楽しむために、人々はこの夜会を愛する。
僭越ながら、そう口にしてはいるが、彼のそれは強い口調だった。ベアードの目は強くそれを望む、ではなく、行わせるだけの力がある。そこまでして私を動かしたいのだろうか。
何のために。
何百年もの歴史の中で、トルスという国は何度となくイチェリナに逆らい、抗い、そしてそれでも何度でも這い上がってきた。それを知っているからこそ、私は彼というトルスの血を、完璧に信じることができない。
勿論今、私がそう思うのは、それだけではないと分かっているが。
「行きましょう」
飾り気もなくただこぼすように言う。それを横で聞いていた従者は、目を見開いた。信じられないと言いたげに、そしてどこか非難を混ぜた視線を送ってくる。それを知りながら、頷いた。
関係ない。
もうあなたには関係ないわ。
「義兄様、エスコートを願えますか？」
彼はその言葉にようやく意味が伝わったようで、ふわりと花のように微笑んだ。美麗な男の顔に浮かぶ花は、純粋なまでに美しく。一瞬そんな義兄を疑ったことに罪悪を感じたが、それもあっさりと心から消し去る。
罪悪ではない、それはどうしようもない真実だ。
「勿論だよ、シャルロット。君が来てくれるなら、きっとフォエマも喜ぶ」
フォエマ。
そうか、そうだった。
ベアードの大切なものを呼ぶような、優しい声に思わず絆されそうになるのをどうにかして押しのける。そう、フォエマは、彼の最も大切な友人だった。壊れそうなまでに儚いかの男を思い浮かべ、納得した。
彼がここまでして私を呼びたかったのは、きっと親愛するフォエマに義妹を見せびらかしたかったのだろう。
「フォエマ様の主催する夜会だったのですね」
「言ってなかったかな。そう、彼が久しぶりに開いてくれるらしい。だから、シャルロットも、もう無茶をしてはいけないよ」
その優しすぎる穏やかな言葉に、目を合わせて仄かに笑う。

あなたにそんな言葉は似合わない。
「分かっています、義兄様」

13

翌朝、目を覚ますと触れる空気はひんやりと冷たかった。上半身を起こしつつ、左手にある窓の外を見ると、白い雪原が太陽を反射してきらめいていた。硝子に触れるとそれはどこまでも冷たく、結露した水滴が伝って窓枠にこぼれる。

フォエマという男の夢を見た。

彼はひどく身体の弱い子供だった。いつもベアードと二人、巨大な書斎の中で頭をつき合わせて、読書をしているところを見かけた。義兄の柔らかな銀髪と、フォエマの青白く病的な肌を見る度に、何度も見てはいけないものを見てしまったかのような罪悪感が生まれた。それがどうして罪悪だったのかはわからない。だけれど、彼と義兄がああやって親しそうに、そのくせわずかに冷たい眼差しを向け合っている姿を見ると、どうしてかいいようのない不安にとらわれた。幼いはずなのに、二人はどこか達観していた。自分の価値を知っているかのように、その目は時折透明になった。それはとてもよく似ていたのだ。

そう、二人はよく似ていた。

きっと二人は自分たちが鏡の向こうのように、同一で正反対だということを理解していたのだろう、それはまるで私とウィルのように。

ただ、義兄と彼と、私たちの違いがあるのだとするならば、彼らが二人男であったことなのだと思う。お互いへの依存性があんなにも高いのに、それを抑えて二人は淡白に生きている。できる限り傍に行かないように、慎重に、慎重に。

それは二人が幼かった頃にはありえなかった。彼らはよく一緒にいた。ベアードは、私や兄、叔母と過ごすよりも、彼と共に過ごすことを好んでいた。それを私は不思議だとは思わなかった。だって、フォエマは私にとってのウィルなのだから、むしろそれが当然だと。

子供のように無邪気に外で遊ぶことはしていなかったように思う。私とウィルが遊びまわって帰ってくると、時々あの二人がぼんやりと書斎からこちらを見ていることに気がついた。何度か大きく手を振って、彼らは一瞬きょとんとすると、二人同時に微笑んだ。それはひどく大人びた笑みで、同時に幼子のように純粋だった。そしてまったく同じ笑顔だった。それは、とても温かいものにも、怖いものにも思えた。

フォエマもやはり、外来貴族と伯爵家の混血児だった。イチェリナの貴族は表立って口にしないが、彼らはイエラ・イチェリナの子孫である自らを誇りに思っているため、他国の者をあまり好まない。だから、フォエマはあの城で、蔑まれていた。それはちょうどベアードが、トルスとの混血児として蔑まれているように。

あの二人が出会ったのは偶然ではないだろう、私はそう思う。

遥か高く聳え立つ堅牢なあの城で、蔑まれた子供たちが巡り合うのは奇跡だったのだろう。かたや王家のはみ出し子、かたや外来貴族の混血児。本来はきっとありえぬ邂逅を、ベアードは一度目を細めてこういった。英雄を好いてはいない彼が、初めて。

「フォエマと出会えたのは、彼女のおかげだと思っているよ」、そう。

二人が会ったのはどこだったのだろう。そこまでは知らない。だが、それはきっと、二

年前叔母が結婚式を挙げたあのイエラ・イチェリナの眠る教会だ。わかりはしない。それでも、あれほどまでに英雄を崇拝することを避ける彼がああいったのならば、あの裏庭以外にはないように思う。王家の者以外入ることを許されぬ教会は、幼いフォエマにとってどれほど魅力的に輝いていたのだろう。

白い頬を寒さのあまり紅潮させて咳き込みながら、熱っぽい身体を引きずってこっそり寝台から抜け出した彼は、教会の白い扉に触れた。それはどんな思いもなかったのかもしれない。ただ彼は抜け出したかった。もういつまでも病に伏せているのは、何よりも苦痛だった。もういっそのことこの世から、乳母のいうところの常世からいなくなってしまいたかったのだ。だから、ここではないところにいる英雄の墓を目指す。このお墓ならきっと、自分を救ってくれるだろう、そう思って。

「こほ、こほ」

勿論本当にそう思っているわけではなかった。ただ何かに縋りたいだけなのだ。この苦しい咳や、痛い注射や、重い頭が嫌だった。ほかの何かで気を紛らわせたくても、それを両親や乳母は許してくれなかったのだ。病的に白い肌、色素の薄いブラウンの髪。弱く今にも消えてしまいそうな錯覚が、フォエマの身体を動かした。

生きたい。

純粋な望みだ。死にたいと思っているくせに、どうしようもなく彼は生きたかった。

扉を一生懸命に押す。それでも笑ってしまうくらいに少しずつしか動かなくて、雪の中であるのにも関わらず、音はひどく耳に響いた。誰かに聞きつけられることを恐れながらも、少年は笑ってしまうくらいに真剣だった。あと少し、あと少しで何かが変わる。

扉はゆっくりとじわじわと開かれて、真っ白な世界が広がった。

「……わあ」

純白だ。まるで天国のように白く白くただ白く。穢れのない世界は一面に。厚いウールを着込んだ自分があまりにも不釣合いで、笑ってしまう。白の中の薄汚れた茶色。雪の中に間違えて出てきてしまった土みたいだ。

もう少し奥に行ってみようと足を踏み出して、鋭い言葉がフォエマを貫いた。動けなくなる。

「誰。ここに入れるのは王家だけだよ」

冷たい声。だけれどその声はどこかで聞いたことがある気がした。誰だったのだろう、確か彼女たち。皇子さまと皇女さまと、それからレティリアさま。あの人たちと時々一緒にいた、この、――声。

不意に目の前が暗くなった。顔を上げて思いのほかすぐ傍に、少年がいたことに気がついてびっくりする。銀色の髪を結わいた、少女のような少年。まだ少し紫の濃い藍の瞳。

彼、ベアードは、やはりびっくりしたようにそこにいた。

「君、誰だい？」

それが、始まり。

## 14

「だからさ、君がどうしてあそこに行きたがったのか僕にはわからないよ」

「君にわかってもらわなくてもいいよ、ただ入っちゃっただけだから。これは何度もいっているだろう」
「関係ないよ。もし君が何らかの悪意を持って入ったのだったら、僕は君を裁かなきゃいけない」
　ベアードの言葉にフォエマは噴出した。むっとする彼の前で、厚い羽毛布団にくるまったブラウンの髪の少年は、耐え切れずにもう一度笑う。
「何を笑っているのさ」
「君が俺を裁く？　まさか。君はそんなことできないだろう」
「あそこに関しては話が別だよ、フォエマ」
「ああ、それをいわれると何も返せないね。じゃあ聞いてもいいかな」
「今質問しているのは僕だぜ、伯爵」
「そういいながらいつでも君は許してくれるだろう、ベアード」
　目を伏せながら笑う少年に、ベアードは言葉を返せない。どうしてだかわからないが、この同い年の伯爵家の嫡子にどうしようもなく彼は甘いのだ。本当になんだってこいつに甘くなるのか、自分ですら理解できない。それでも彼の頼みごとは大体叶えようとしてしまうのだ。
　唇を尖らせた王家の少年にフォエマは微笑みかけながら、その白い肌によく合った涼しげな声で尋ねてきた。
「君こそどうしてあそこにいたんだい。あとでウィルヘルムに会ったとき言っていたよ、ベアード様が講義をさぼっていたって」
　その問いに答えないで、彼は自分の銀色の長い髪を弄んだ。もはや癖になっているのだろうか、それは手馴れている様子で、より少女らしさが増す。わかってやっているならベアードは本当に意地が悪いと思う。彼の母であるキャロライン様はベアードを放任主義そのものに放り出しているらしいから、余計彼女に対して何らかの感情を抱いているのだろうな、と考えるのは安直ではないと思った。
「……あそこは居心地が良いんだ」
　ぽつりと呻くようにつぶやいた気がして、フォエマは顔を上げた。ベアードは少しだけ不愉快そうに言葉を続ける。
「姉さんは、トルスの血が混じっている子が、ああいう神聖なところを居心地が良いっていうのは、嘘だっていうんだ。トルスは逆賊だからイエラ・イチェリナの尊い神聖な力をわかるわけがないって」
　言葉にフォエマは何も返せなくなる。トルス帝国が逆賊といわれるのは、何度もこの大陸の王であるイチェリナに歯向かい、大陸をのっとろうとするからだ。イチェリナ皇国で育った市民の子は、みなトルスとの長い確執を教えられる。たいていはトルスに対して上から目線で、温情のおかげだとでも言わんばかりに。
　だがフォエマはそういう言い方をする先生が好きではなかった。確かにイチェリナ側からそうなのかもしれない。ではトルスからしたら？　大陸をのっとろうとしているわけではなく、本当に正しいのはトルスだとしたならば、それは何を示しているのだろう。
　勿論そんな恐れ多いことを誰にも言ったことはなかった。あそこで知り合ったベアードではあるが、彼にも言うつもりは毛頭ない。キャロライン様の狂言が増すだけだと幼いな

がらにもフォエマはわかっていたからだ。
「本当に、そうなのかい？　ベアードは逆賊としてあそこにいるの？」
だから彼はそういった。大切な友人に対する一番の敬意を込めて、そう静かに問うた。
ベアードはばっとこちらを振り返り、横たわる病弱な少年の胸倉をつかみあげた。幼い子供の頬は怒りで赤く染まり、藍色の目は憎しみを込めて吊り上っていた。けれどフォエマは動じることなく、ただ黙って彼を見つめ返して答えを求める。
「そんなわけないだろう……！　僕は逆賊なんかじゃない。そんな、そんな下種な人間じゃない！　僕は、僕は父様の子で兄さんの弟で、ロッティの兄で！　僕は、そんなやつじゃない！　僕はトルスなんかじゃない！」
憎悪と悲しみと失望と落胆が混じった声は哀願するようで、そんな情けない声音で伯爵身分の少年をなじったことにベアードは自身に失望した。こいつは何にも知らないのにこんなことをしたら、僕は王家であることなんか誇れやしない。顔を歪ませ銀髪の少年はフォエマの胸倉から手を離した。素直ではないが、悔しさを隠し切れずに餓鬼のように謝罪する。
「ごめん」
こほ、と軽く咳き込んだフォエマはベアードを見上げてあはは、と笑い声を上げた。それがあまりにも明るい軽やかな声で、馬鹿にしているのかと頭に血が上る。殴ろうと彼を見て、けれどその意欲は嘘のように消えていった。
「あはは、君って本当に本音を言わないタイプなんだね。会ってもう一ヶ月も経つのに、やっと本音を言ってくれた」
やさしい力強い笑みを浮かべていた。なんてことないと言いたげにすっきりした表情で笑う、フォエマという少年を前にしてベアードは悟る。僕はきっとこれからずっと、ずっとこの少年とあの子に囚われて生きるのだと。どうしようもなくわかってしまった。自分の中に空白を作り続けるのはあの子で、その空白を絶え間なく埋めてくれるのは、この病弱な貴族の少年であることを。
わかってしまった。
「君は、本当に変わっているよ」
笑うフォエマを呆然と見ていたベアードは、ようやく我に返ったのかそう苦笑しながら、先ほどまで座っていた椅子に腰掛けた。その言葉にやはりフォエマは笑ってしまいながら返す。
「そうかな？　俺は君のほうが変わっていると思うぜ。普通病気の子供と同じ部屋にいようなんて思わない」
「そんなことは関係ないね。僕はここに居たいからここに居る。それに何の問題があるんだい、フォエマ・ディオ・アルセック？」
ベアードの言葉にきょとんとしてしまった。彼にフルネームを名乗った覚えがないからだ。フォエマの表情に気がついた目の前の少年は、一瞬しまった、というような顔をしてそれからその藍色の眼差しをそむけた。
「な、なんだい、文句でも」
「……はは、まさか。あるわけないよ、ベアード皇子」
わざとらしくそうからかってやると、皇子は苦虫を噛み潰したようななんともいえない

顔をして、悪趣味だよとぼやいた。
知っているよ、ベアード。

15

アルセック伯爵領は王都から極東湾岸都市ローインに行くまでに必ず通る、アールスという都市を指す。王都から出るとまずアールスを通り、次にウィオシャを抜け、イロップ、オイローと続いてようやくローインにたどり着く。改めて先日の即位式のとき、クライド卿がどれほど遠くを駆けてきてくれたかを実感する。私は誰からも救われてばかりだ。
「これから五日だけ休暇を取ってくる。サルサ老師、その間のことはよろしく頼みます。何かあったら迷うことなく伝令を」
朝の議会で簡潔にそう告げると、老いた男は目を見開いた。
「本当にいっておるのか？　この大事な時期に……」
「サルサ老師、以前おっしゃっていたじゃないですか、シャルロットには愛人が必要だと。それを探しに行って来るのですよ」
「ベアード殿下、シャルロット陛下とお呼びしなされ。いつまでも子供のままごとをしておっては成長できぬぞ」
口を挟んだベアードを一蹴し、ちゃっかり小言までいった彼は、わずかに不安そうにこちらを見てきた。何を言わんとするかはわかっている。しっかりと彼にだけ見えるようにうなずくと、わずか安堵したように微笑んだ。
わかっている、私は決して誰とも契らない。
「ふむ、まあわかっていらっしゃるようなら良いでしょう。ただし五日できっちりとお戻りになるのですぞ。して場所はどちらで」
「アールスですよ、老師。安心してください、僕が完璧にエスコートしますから。それになんといったってフォエマの宴だからね、安全面にぬかりはありませんよ」
「フォエマか……久しい名前じゃのう。久方ぶりに会うのじゃろう？」
サルサの言葉にベアードはその眦をやわらかく緩ませた。この義兄は、フォエマのことを信じられないほどやさしい表情を浮かべる。どうしてか、なんて問うべくもないのだけれど。
「そうですね、かれこれもう六年は会ってないのかな……」
はっきりいってアールスは王都のすぐ隣の都市だ。会おうと思えばいくらでも遊びにいける距離であるにも関わらず、彼らは決してべたべたと近づこうとしない。それはもうシェルマになるまでに散々やった、もういいだろうというように。そのくせ彼らはお互いを必要としているのだ。
ある意味これも正しい形なのだろうと思う。私のように離れることも失うことも怖くて、傍に置いておくことしかできない曖昧さよりはよほど、潔い。
同じことを考えていたのだろうか、私の従者と目が合った。が、何事もなかったようにそれをそらす。関係ない。これから私はその言葉を何度でも吐き続けるだろう。胸の痛みを押し殺すために何度でも際限なく。
「さ、じゃあサルサ老師のお許しもでたし、行くとしようか、陛下」
まるで道化のように手を差し伸ばされて、私はその手をそっととった。促されるままに

老師に礼をして部屋を出る。
あと、少し。

その頃、フォエマの屋敷では、当主の部屋で主従が淡々と会話をしていた。屋敷全体は今夜行われる宴のためにどことなく騒然としていたが、彼らがいるその部屋は静謐だった。
「あの方の手助けをなさるおつもりですか」
年老いた男は、寝椅子に横たわる儚げな相貌の青年にそう問うた。それは詰るようでいてそして深く悩んでいる声でもある。それを知っているのか青年は美しく微笑んだ。今にも消えてしまいそうなその笑みは、見る者の心をひやりとさせるほど、危ういものであった。
「手助けじゃないよ。俺はあいつの報われない恋慕を少しでも助けてやりたいだけ。どうせ、余計心苦しくなるだけなんだろうけどね」
ふふ、と意地悪く笑う。子供のように無邪気でそして達観しきった眼差しの彼。彼こそがフォエマというベアードの唯一無二の親友であった。その様子を見守る初老の男は、物悲しげに彼を見やる。青年はそれを受けて、ふわりと笑った。
「そうやって虚しいものを見るように見ないでおくれよ。俺は、それでいいんだ。少しでもあいつに俺を覚えていてもらいたい、っていうならそれは傲慢すぎるかな。なにせ女王を利用することになるんだから」
「フォエマ様」
「冗談、ではないけれど。これで、もし、もしも俺が女だったなら、話は変わっていたんだろうね」
嗜めた声を一笑し、その淡い青の眼差しを灰色の空に向けた。切なげな瞳であった。
それはそう、まるで殉教者のように。
「夕方には人が来るだろう。悪いけど俺が出られるのは始まったときだけだ。挨拶や面倒ごとは任せるよ」
「かしこまりました。お休みなさってください」
「わかっているよ。よろしく」
老人が部屋を出たのを認めると、青年は静かにその瞼を閉じた。
つぶやかれた小さな言葉。
「ベアード」
君は、どうして彼女を求めてしまったんだろうね。

## 16

イチェリナは北に位置する分、どうしても冬が来る早さによって何もかもが変わる。今年は特にその中でも穏やかな、例年稀に見ないほどゆっくり冬はやってきた。夏、秋と作物は豊作で、塩害や凍土も目立った災害にはいたっていない。こうしてたとえ隣の街といえど、私が玉座を空けられることが立派な証拠だろう。硝子の外に、はらはらと六花が零れて落ちる。空は、ぐったりと重い鉛色を横たえていた。
その馬車に乗り込んでいるのは、私とベアードによってつけられた侍女だった。確か名前はベアトリチェ。我が兄ながらやってくれる。薄い失笑が唇から漏れた。彼女はトルス

の娘だった。
笑ったのに気が付いたのか、侍女はつ、とその目をこちらに向けた。窺うようなくすんだ青。ほんの少し、憎らしい。メアリはたとえどんなに私を畏怖していても、そんな臆病な眼差しを向けやしなかった。
「いかがいたしましたか、シャルロット陛下」
――馬鹿なことを。
首を振る。忘れてしまえ。あの赤い少女を。赤く散った少女を。
「いえ」
赤く、散った。
そういったのは私ではない。ならば答は簡単に弾き出せた。
ベアトリチェはおどおどと私と私が見ている窓を見比べ、それからやはり小さな吐息をもらして前を見つめた。やりづらいのだろう、あの義兄のもとにいたのなら、なおさら。しゃべらなくても向こうから話を振ってくれる分、それは確かに楽だった。そして、言葉を発さないなら、彼女は本当にベアードのもとにいた。
あの女のところではなく。
「義兄様は、仕えるに足る、主人？」
尋ねてみる。別段深い意味はない。彼女は声をかけられたことに目を見開き、それから頬をわずか紅潮させてこくりと恋する乙女のようにうなずいた。
「はい、すばらしい方です。私のような一介の小貴族の娘に対しても、分け隔てなく接してくださって。しかも陛下のお傍付きになれるなんて、思ってもみませんでした。ベアード様はよく陛下のお話をなさいますのよ」
「例えば？」
分け隔てなく接する？　あの男が？
一瞬紡ぎだされた言葉と、知っている人間との落差に戸惑う。そうか、私が知っている彼は、ベアードという人間ではなくて、私の義兄としてそこにいるのか。
丁度、ウィルが私の従者としてここにいないように。
「昔、先々代国王陛下に呼ばれたときに、陛下は時間ぎりぎりまで眠っていて、紅茶の時間のときにあわてて駆け込んできた、とか。陛下は紅茶が好きですものね。そうそう、キャシャラから取り寄せたラッチェルはいかがでしたか？　ベアード様が、陛下がお好きな味だからお持ちなさいと仰って、持たせてくださったのです」
先ほど飲んだ紅茶か。義兄は呆れるほど、私の好物をよく知っているなと感心した。事実、爽やかでどこか冷涼な味に、沈み込んだ茶葉の甘みが香り立つその紅茶は、まさに私の好みそのものだ。というより紅茶の本場イロップを凌ぐほど、キャシャラは入れ込んでいたのか。大使として遣わせた者からの便りを見る限り、キャシャラは今ようやく農地を開墾し始め、ゆっくりと国土を作り上げていた。何ら恐怖を抱かないはずの場所で、わずかな不安を感じる。あの国の唯一の特産物とは、何だった。
キャシャラは小国だ。周りに大国がひしめく中で、かの国は唯一無二、軍を持たない完璧な平和主義国でもある。西にキクリの大森林、北にウルスーヴェの荒廃のひどい砂漠、東に強烈なまでの軍事国家トルス、南に明志国の壮大な鵬衆連峰などさまざまな困難に囲まれて、よくぞあのような国が生まれたものだと感嘆する。

しかし遥か昔、トルスやウルスーヴェを征服し、キクリを最西端まで追い詰め、鵬衆連峰越えをしたという史上最強の国であったことを考えれば、納得するしかない。時代は荒れに荒れて妖魔が国という国を徘徊し、人が皆死に絶えていた暗黒時代。その中で興ったのがキャシャラであり、そして暗黒時代を強制的に乗り越えさせた。それがすべて終わったあと、興味がまるで消え去ったかのように支配を放棄し、何もかも捨て去った。そうしてただその荒療治を見守るしかなかったイチェリナに、彼らは降伏した。

史上最強とまで言わしめた国の終焉は、果たして何が目的だったのだろう。今、キャシャラはイチェリナの属州国であり、独立したとはいえない。あの小さな栗鼠のような国は、その頬に何を溜め込んで刃を磨いているのだろう。

イチェリナの味方成りえるのは、国交が盛んなキャシャラやトルスではなく、唯一あの国しかない。また、真の意味で敵に成りえるのも、同じ。

何かが動き始めているのか。

こつん、といきなり何かが額にぶつかった。

「陛下。本日から五日間、執務はすべてお忘れください」

顔を上げればベアトリチェがわずか頬を緩ませて、その綺麗な白い指を私の額に当てていた。額というよりも、眉間。先ほどまでの緊張はもうなくなったのか、彼女はやわらかに笑った。

「眉間に皺が寄ってはせっかくのお美しい顔が台無しですわ。ベアード様もご心配なさっていました。毎日連日連夜お仕事をなさっているのでは、お身体にもよろしくありません。この五日間だけでも、羽を伸ばしてください」

一瞬何を言われたのかわからずに、まじまじと彼女を見つめてしまう。けれど侍女は艶やかに柔らかに笑っただけだった。

「そう、ね」

目を伏せる。けれど内心はやはり混乱していた。疲れている、のだろうか。あまり自分の身体の不調を気にしないのでどうにもよく分からない。いつもなら、そういつもならウイルとメアリが、あの子が。

「……確かに、疲れているわ」

もうだめだ。離れない。

あの、赤が散る瞬間。

私が思ったのは、何だった？

馬車がゆっくりと留まる。ベアトリチェは嬉しそうに顔を綻ばして、馬車を降りると笑った。

「休みましょう、陛下」

新たな火の手が上がる前に。

一瞬の休息を。

## 17

仮面舞踏会が行われる三日目の夜、ベアトリチェと共に部屋を出た。外で着替えが終わ

るのを待っていたウィルがあとに従い、三人でホールに向かう。本当は王付きの護衛がいるから三人ではないのだが。
　通りがかる人とわずかに会釈しながらちらりと見た硝子の向こうで、雪原が闇と共にそこにあった。指先がちり、と痛む。寒いわけではない。むしろイチェリナ人たちは北国だから寒さには慣れている。雪原で風が舞ったのか、月光に照らされて六花がわずかに浮かび上がる。つ、と足が止まった。
　雪の中に浮かび上がる、女の姿。
　広がった長い髪は月光によってか白銀に映り、けぶるような瞼がその大きな深遠の眼を覆い、白い肌の中唇だけが異様に赤く。羽織る衣はこの国のものではなく、ただずるりと垂れたその藍色がかの国を思い起こしぞっとする。けれど口元に乗った笑みはその恐ろしいほどの静謐な空間とは対象に、優しい母性に満ちたそれだった。
「へ……い、か？」
　目が彼女から離れない。食い入るように見つめていれば、どこか幼い女は細い指をこちらに、正確に私の胸元を指した。指を追うようにして胸元に目を落とし、はっとする。そこは。
　病巣が巣食う場所。
　どくん、と一際鼓動が大きく聞こえた。呼吸が不確かになるのを必死に抑えようと口元に手を当て、もう一度硝子を覗く。女は大きな眼を緩ませて、わずかに哀しいものを見るような目で私を見た。赤の唇が開かれて、言葉が落ちる。食い入るように見つめて言葉の意味に困惑を浮かべれば、彼女はふ、と笑うと忽然と姿を消した。
　そして、ようやくまわりの音が入ってきた。
「陛下、陛下？」
「ベアトリチェ、申し訳ありませんが水をもらってきてください。陛下、聞こえますか」
　ウィルの指示に侍女はあわてたように駆け出し、柱に寄りかかって立っていることに気が付いた。呼吸が苦しい。この廊下では人に見られる。そう非難の目をウィルに向ければこくりとうなずき、近くの扉に護衛を向かわせ入れるか確認しながら、私を抱き上げた。いつ以来触れていなかったのだろう、その温かい腕に泣きそうになる。
　あの女は、誰。
　人ではない。人ならあんな風に消えられない。ならば妖魔か。
　けれどあそこまで人に類似した姿に身を変えられるのだろうか。妖魔については一通り脳に叩き込んではいるが、この王都に近い街で妖魔が出るなど聞いたこともない。もしもそれが有り得るならば、それは国の基盤が緩んでいる証拠。
顔を歪めれば咳が散った。たまたまあった椅子に身体を横たえて、まずいことになったと顔をしかめた。
「薬、は」
「持ってきております。ですが、水が」
　いいから寄越せと手を伸ばせば、彼は一瞬逡巡した後薬をのせた。唾で飲み下すしかない。口に含もうとした直後、唐突に手を引きとめられた。呼吸が荒い。仮面がずらされ同時にウィルを見つめて背筋が凍った。もしも、ウィルがあの女の手先なら。
　目が合った。翡翠の底を覗かずとも、彼の意図を理解していたのに。

ここではだめだと首を振る。苦しい。それを知っているからか、ウィルはわずかに身を乗り出して私の手から錠剤を摘み取り。
「陛下！　ウィル、もって参りましたわ！」
ベアトリチェが扉を開けて飛び込んできた。そのまま何が行われそうになっていたかまったく気づかぬ様子でこちらへと近寄り、ウィルが手に取った錠剤を奪い取って私に水と共に差し出した。
「陛下、ご無理はなさらないでくださいね」
ほっとしながらも呆然となるウィルが可笑しかった。ありがたく受け取り水で薬を押し流す。こんこんと咳をすれば、侍女はいつの間に用意したのか冷えたガーゼで噴出した汗をぬぐってくれた。
「陛下、せっかくの舞踏会ですが、今夜は辞退なさったほうがよろしいかと思います。お具合がよろしくないことを、まわりに気づかれてしまうのは少し」
「そうですわ陛下。明日もまだまだ舞踏会は続きます。無理をなさらず休んでいたほうが得策だと思いますわ」
休んでしまえば確かに楽だろう。そっと呼吸を繰り返す。無理やりに動かしていたのか心臓が乱暴に脈打っていた。そのリズムが穏やかになってから身体を起こす。これもひとつの仕事だ、休めない。
「いえ、行くわ」
「陛下」
「陛下！」
「行くわ」
二度はない。鋭い声に二人の臣下は戸惑い、やはり従者のほうが先にうなずいた。身体を起こすのを手伝って、耳元で声は落ちる。
「無茶を、なさらないでください」
一瞬だけ、翡翠は深海に落ちた。いつもとは違う艶やかな金の巻き毛が雪肌を覆い、唇は桃色に輝いて、触れた肌は凍えるほどに冷たい。同様に、ウィルに向けられた眼差しには、どこにも優しさなどないだろう。
言葉を失った彼から身を離して立ち上がる。よかった、そこまでひどくはないようだった。発作と雪の中に見たものが重なったから、あんなにも動揺してしまったのだろうか。ずきずきと、今度は違う痛みが胸を突き刺すのを知らない振りをして、仮面を手に取る。高名な細工師ヴァロンの作だろう、それで素顔を隠す。この感情を、誰にも悟られたくなかった。
あのとき、雪原に立つ女が、一瞬。
幼い頃の自分に、見えたことを。
何も知らないロッティは、もうどこにもいないのに。

## 18

フォエマは外来貴族でありながらその商才は、高名な彼の父を遥かに上回る。自らの才だけではないとはいえ、彼のその有り余るほどの手腕は私から見ても常人とはいえなかった。そのフォエマ自身が主催する舞踏会は、商人上がりの貴族によくある下品なそれとは

違い、どれもこれも繊細で雅だった。
しかし、どうしてだろう、そこはかとなく漂う甘い香りが気になった。これだけが唯一場違いのように思う。舞踏会では普通貴婦人たちが皆香りを身にまとうため、すべてが交じり合いとてつもない香りに変化する。それを抑えるために香をたくのが主流だが、この流麗な舞踏会に強烈な甘さは似合わないように思った。ここまで美しく場を整えるのに、フォエマがそんなミスを犯す？　それは有り得ない。ならば。
「ルーシェ。ようやく来たのか、遅かったね」
偽名を呼ばれ、はっとする。仮面を被っているのにも関わらず、その容姿の美しさはまるで衰えない義兄が近づいてきた。目は前髪で隠されてわからないが、外に出ている口元はかすかに微笑んでいる。その隣に立つのは幼い頃から何も変わらない、あのすべてを悟ったような淡い目の男。儚い眼差しをそのまま向け、て――。
違った。
ベアードの隣に立つ彼は、はっきりと私に嫉妬を向けていた。真っ正直な嫉妬心を隠すことなくさらけ出し、私がそれに気づいたのを見て取ると、薄い唇に白い指を乗せて。
しい、と笑った。
「どうしたんだい、ルーシェ？　顔色が悪い」
ベアードの問いに首を振る。フォエマは既に何事もなかったかのように、こちらを向いて私の手をとりそこに口付けを落とした。
「お久しぶり、ルシル。六年間で、見違えるほど美しくなったね」
「ありがとうございます、フォエマ様。あなたもお元気そうで何よりです」
社交辞令をさらりと流して感想を述べる。その意味を正確に汲み取った青年は柔らかく苦笑した。彼だけは仮面を被らず儚い美貌をさらけ出しており、それを見て頬を染める娘たちがいる。知っていてやっているなら性質が悪い。
「そうだね。前よりは、大分。その節は君にも迷惑をかけた」
「そんなことはございませんわ」
目線を伏せてそう応えた。彼が何を考えているのか、分かるようで分からないのが苛立たしい。これからどうするか決めるに決められない。そういうところは何も変わっていなかった。
「話があるなら二人で踊ってきたらどうだ、フォエマ、ルーシェ」
義兄が唐突に声をあげてそちらを見やれば、ちょうどウェイターからグラスをもらっているところだった。その姿を見てフォエマが、あはは、と軽やかな笑い声をあげる。
「これくらいのことで嫉妬しないでくれよ、ベアード。本当に君は堪え性がないね」
「そんなわけないだろう。それとも今待っている挨拶客全部に接待するのか、君は？」
ふんと鼻をならした義兄に、フォエマは心底嫌そうな顔をした。
「それは嫌だな。じゃあ優しいお兄様に免じて一緒に踊ろうか、ルシル」
茶目っ気たっぷりに笑って、彼は私に手を差し出した。細い病人そのものの白い手を。
一瞬、違和感を覚える。何かが圧倒的に間違っているような。
けれどその答えを出すことよりも先に、やらなければいけないことがある。だから私は彼の白い手をとった。口元に薄い微笑を浮かべて。
「ええ、是非」

教えて。あなたは何を企んでいるの。

フォエマのダンスは完璧だった。そつなく無駄なく流麗な動きで決して女性にリードさせない。安心して彼のステップに身を委ねていれば間違うことなど有り得ない、そう思わせるような踊りだった。けれど女性とダンスした経験があまり多くないのか、触れる手は緊張しているように硬い。

いや、違うだろう。彼は間違えて私を壊すことを恐れている。強く握り締めれば硝子のように砕け散ることを恐れている。そんな気がした。

「髪、どうやったんだい？」

す、と零れた金髪を手にとって、唇を落とす。そうしている間にも青年はステップを淡々とこなしていく。器用なものだ、そう感心しながら目線を落とす。傍から見れば、その行為に頬を赤らめ恥ずかしがっている娘に、見えるだろう細心の注意を払いながら。

「ただの鬘です」

けれど落ちる言葉はこの上なく淡白だ。彼本人に演技をする必要などない。私が凍りつく前から知っていたのだから、それだけは確かだった。それをフォエマがどう思っているのかはわからないが。

その簡潔すぎる返答に彼は楽しそうに笑った。誰を刺激するためにか顔が一際近づいて、額と額が重なる。そっと顎に指が伸びて顔を上げさせられ、それを抵抗することなく受けいれる。目線を彼に合わせれば青年は妖艶に笑っていた。それが横からどう見えるかなど、考える必要もない。向けられる視線の中で強いものを感じながら、淡々と、ダンスは違うことなく続いていく。

「本当に、美しくなった。それでも、疲れているね、シャルロット」

疲れて、いる。

彼から見ても分かるほどなのだろうか。その不安を目に浮かべれば、彼はするりと顔を引き離した。そのまま回りの目を気にせずに優雅に舞う。

「ああ。ひどい顔をしている。何があったのか尋ねても？」

表情がわずかに変わった。今までのふざけた様子は影を潜め、その目は真剣にこちらを向いて私の口から出る言葉を一言も聞き逃さないとでもいうかのように。その仕草につきりと胸が痛んだ。じわりとにじみそうになるそれを、どうにか押し留めて言葉を落とす。

「メアリを、喪いました」

私には兄が二人存在する。実兄と義兄。だけれど彼もまた、私を妹のように扱ってくれるのだ。あなたから確実に大切なものを奪うのに。それなのにどうして私を心配するの。守ろうとするの。

「あの子が」

表情が暗くなった。フォエマもメアリのことを知る人物だった。ならば教えて然るべきだろう、それを行ったのは誰なのか。

「私が、殺しました」

顔色ひとつ、変えなかった。フォエマはただ一度こくりと頷いて、ダンスをやめると壁際の椅子に私を座らせた。ウェイターから果実酒の入ったグラスを受け取るとそれを勧めてくる。ありがたく受け取ってそうっと口に流した。

「悔やんでいるの？」
首を振った。悔やんではいない。間違ったことを行ってしまったなどとも思わない。ただこの堪えようのない喪失感が、止まらなかった。口には出さなくとも伝わったのか、フォエマはそっと私の手をとって握り締めた。優しく引き止めるような強さで。けれどもうにじむものはない。大丈夫、あれは、大したことじゃない。そう、大したことではないはずなのだ。
「そうは見えないよ。泣いても、いないんだね」
目元をそっと撫ぜられる。腫れてすらいないのは自分でも分かっている。私に涙を流す資格など存在しない。それが許されるのは、絶対に私ではない。
愚かな考えなのは理解していた。そんなものはただの自己満足にしかならないということはもうわかっていた。それでも。
不意にぐらりと眩暈がおきた。先ほど覚えた違和感とは違うものを感じつつ、立ち上がろうとしてよろけフォエマに抱きとめられる。細い腕、細すぎる腕。あることに気づいて顔を上げれば、彼の顔はもはやぼやけて輪郭さえ映さなかった。意識が遠のいていく。
「君は、愚かだね」
彼にはもう、時間が残されていないのだ。

## 19

意識が戻ると同時に私は身体の動きが鈍いことに気が付いた。右手をついて身を起こそうと力を入れるが、冗談ではなく何もできない。そのくせ視界はやけに澄んでいて、だから見たくもない顔を見、聞きたくもない声を聞いた。伸ばされた手を拒絶することすらできずに、そっとベッドに押し戻される。顔に張り付く違和感はないということは、仮面は今外されているのだろう。
「目が覚めた？　シャルロット」
その藍色の眼を睨むわけでもなくただ見つめれば、彼は一瞬泣き出しそうな幼い表情を浮かべた。あまりにも不安定な表情はけれど瞬きをする間に消えている。ただ妖艶で蠱惑的な笑みを浮かべ、するりとこちらへ近寄ってきた。押しとめる力のないまま男の細長い指が、頬を撫ぜるのを感じていた。目線は逸らすことなく男を見つめている。
まるで、何も感じていないかのように、平然と。
「君は、目も逸らさないんだね。僕が何を望んでいるのか、分かっていないの？」
声が、まるで許しを請う幼子のようで。
沸き起こる戸惑いを握り潰し、表情を一切変えることなく彼を見る。この状態で何が起こるのかなど知るはずもないことだ。少なくともアルフレッドやベアードが知っていたのとは一転し、私は皇女である時分からそれらを排除して生きることが決定されていた。それでもそれを心配した侍女や乳母が少しだけ教えてくれたが、私には理解できなかった。この状態で男が何を望むのか。分からない。
ただ、その藍色の底から浮かび上がる狂気が。
散っていった赤よりも濃厚に、濃密に忍び寄るようで、恐ろしい。
もしもこれがあの翡翠ならば――、そう考えた自分を笑いたくなった。ずきりと痛むのは心臓か意識か。判別する頭もゆらゆらと溺れるようで、まるで底なし沼に落ちてしまったかのような浮遊感が怖い。

「義兄様。あなたは、何のために、ここにいるのですか」
勿論私のためではない。フォエマのためでもないだろう。ましてやあの女のためでもないはずだ。ならば、彼はどうして今、私を捕らえている？
何を望んでいるのか、分からない。
ただ疑問を口にすれば、男は柔らかく笑って顔が一層近づく。唇がかすめるようなその位置で、藍色の中に孕んだ紫が強烈に芽吹く。温かい息が唇を舐めてぞわりと背が凍った。その底に映るのは。
「僕のため、だよ」
愛欲。
「は」
拒絶する間もなく薄い唇が強引に重なった。咄嗟に引き離そうと乗り出した肩を押すが、薬のせいか力がこもらない。せめて口付けから逃れようと首をひねるがそれすらも許されず、両手はあっさりと絡めとられてしまった。もしもそのキスが幼い頃挨拶のように交わしていたままごとのようなバードキスならば、こんなに私は怯えなかっただろう。
けれどこれは違う。
愛欲によって裏打ちされた本物の口付けだった。いくら知らぬといってもバードキスとの違いが分からぬほど愚かではない。別人のように唇を吸い上げるこの男は、誰。
呼吸が苦しくなって何度も目の前の彼の胸板を叩く。どうにか引き離す頃にはじんわりと汗すらかいていた。理解できぬまま義兄を睨み上げれば、彼はやはりうっすらとどこか寂しそうに微笑んで、私の目じりを拭う。そうされて初めて涙を流していたことに気が付いた。涙で濡れた指が目に入り、屈辱なのか羞恥なのか私は知らず唇をかみ締める。
「どういう、おつもりですか」
「ねえシャルロット。僕がどうして君をここに呼んだのか、考えつかなかったのかい？　聡い君ならとっくに気が付いて、それに対する策すら練っているものだと思っていたよ」
問いに答えず彼は淡々と言葉を落とす。嘲笑かと思えば、けれどいつも通りの薄い笑みが唇に乗っているだけだった。それすらももはや作り物めいて完璧で。理解できない恐怖を覚えたが、弱った身体では碌な抵抗ができなかった。
「何を、仰っているのです」
「シャルロット。君は残酷な人だ。僕よりもレティリア叔母よりも、メアリやフォエマよりも、誰よりも残酷だ」
飛び出た名前に、瞼の裏で赤い血が跳ねる。息を詰めたのに気づいたのか彼は喉の奥でくつりと笑って、私の唇に指を這わせた。震えているのかと思えば違う。そうして気づいた事実に愕然とした。
震えているのは、私だ。
「ウィルヘルムが、どうしてここにいないか分かる？」
何故ここでウィルの名前が？
理解できぬまま首を微かに振れば、彼はうっとりと目を細めた。何よりも妖艶な表情に見蕩れるよりもぞくりと悪寒が走る。沸き起こる焦燥に義兄を押し戻そうとすれば、あっけなく腕に抱かれ耳を唇が撫ぜた。甚振るように耳を甘噛みされて、そして反応を愉しむような冷たい声が。

凍りついた心に釘を打つ。
「彼は、どこにもいない。君と今までいたのは偽者だ」
「う、そ」
嘘だ。有り得ない。だってあの翡翠の眼は、確実に彼の物だった。一度引き離されてそれでも忘れられなかった、あの美しい翡翠。何度も何度も彼を救うために、あの優しい目を優しい人を取り戻すために、私は。薬を飲ませようと伸びた細い指と、唯一すべてを赦せる翡翠の底が、ぐらぐらと揺れていく。あのときに見せた感情は何だというの、どうして私を守ろうとするの、私は、私たちはあなたからすべてを奪ったというのに。
今まで抱いていた疑問が声にならない悲鳴となって、声帯から零れそうになる。それを無理矢理に抑え、代わりに零れた涙の存在に、嗚呼、と溜息が溢れた。それすらも呑み込むように寄せられた唇を拒絶することもできない。
信じていた、信じていた。ただ無性に彼のことを彼だけを信じていた。会うことが許されなかった数年さえも、ひたすら一心に信じていた。けれどそれすらももう終わっていたならば。私がしたことに何ら意味がないのだとすれば。
もしも、あなたが既にどこにもいないと知っていたなら。
「ウィル」
愛してる。

「ベアード、お楽しみのところ悪いけど、時間だよ。女王陛下の騎士様の登場だ」
気だるい夢想を破るようにしてフォエマの悠然とした声が部屋に響く。ずっと抱きしめられていた重さがなくなるのを感じて、呆然と声の主がいるだろう方を向いた。そこに立つのは。
激しい怒りを押さえつけた、琥珀の髪の愛しい人。
「シャルロットを、返していただきます。義兄さん」
熱い涙が頬を滑り落ちたのを、ただ感じていた。

## 20

「ウィル、どこへ行くの」
従者は言葉に答えることなく、滑らかに迷うそぶりも見せずに私の手を引いて歩いていた。いつかのときのようだとぼんやり思いながらそれでも決定的に違う、と感じる。私たちは二人ともすっかり穢れてしまった。あのときの優しさや温もりは欠片もなく、二人とも泣き出しそうなのを必死にこらえて生きていた。みっともないほど哀れな姿で、離れたくなくて。
でも本当は違う。
ウィルはもうずっと前から私の傍にはいなかった。私から離れて既にどこにもいない。どこにも、そうどこにも。
「なら今あなたが掴んでいるこの手は、誰のものだと思う？」
心を読んだかのような言葉にびくりと震えた。ウィルの声。これが偽者だなんて信じたくない。信じられない。
それでもまだ彼は足を止めるでもなく黙々と歩いていた。どこに向かっているのかを知

らぬまま、暗いなと感じる。夜の色は既に夜更けを越えて、回廊の硝子の遥か向こうに紫を塗り替えるようにして橙へと姿を変えていく。いつの間に雪が止んだのだろう、六花が時折風に揺られて白く煌きながら宙を舞っていた。

「わからない。わからないの」

幼い子供のように繰り返す。そう言葉を返すうちにも、ぽろぽろと涙が流れていく。いつの間に私はこんなに泣き虫になったのだろう。もう何年も泣いていなかったはずなのに。堰を切ったように涙が止まらなかった。

「ロッティは小さい頃からよく泣いていただろ。君はずっと昔から泣き虫だった」

そう言い切って彼はくるりと振り返った。いつの間に着いたのだろうそこは、今来た道以外すべて雪景色の小さな教会だった。けれどほのかに温かい。硝子が全面を覆っているのだ。幻想的な空間の中で、すっかりと私を越えた青年が、翡翠の瞳をまっすぐに私に向けて立っていた。

す、と伸ばされた腕にわずか震えれば、温もりが身を覆った。この腕は怖くない。この温もりは、私を何よりも安堵させる。

「メアリを殺したこと、どうして泣かないの」

赤い少女が脳裏にはっきりと現れる。緑のはっきりとした目が何度も何度も、堪えきれない憎悪と愛情を混ぜて死んでいく。何度も何度も繰り返し、繰り返し。彼女を殺めたあの日からあの赤い花が散る夢を見続けた。そしてそれは今も。夢を見ているわけでもないのに、瞼から赤は拭われない。付着して洗い落とすこともできずに、悲鳴すらもあげられずに毎日を過ごしていた。

けれどそれは罰だ。

殺した人間だからこそ持ちうる押しつぶされそうな罪悪感。それは長くもない一生ずっと抱きしめて離すことは許されない。

馬鹿馬鹿しいとも愚かとも思う。

ただ私怨で殺した少女のことばかり覚えていて、戦で切り捨てた人間を覚えてもいないその身の癖に。そんなふざけた記憶しか持たないくせにどうしてあの子のことを、こんなにも忘れられないのか。答えはとっくに弾き出されているのに。愚かしいほど認めてしまうのが怖かった。

「私に、泣く権利なんてないわ。資格も何もありはしない」

「本当はそう思っていないくせに。じゃあどうして今君は泣いているの」

優しい声に問い詰められるようで息が詰まる。そういわれて必死に泣き止もうとしても一度外れたたがは戻らない。そっと背中を撫ぜる手に、どうしてか彼女を思い浮かべてより一層苦しくなった。

「私は、今まで幾人も殺したのに、メアリだけ――、どうして」

メアリだけ特別視なんてできない。

嘘だ。嘘だとわかっているからこそ言葉にならずに、涙がこぼれた。慰めるような手には、きっとウィルだけじゃない誰かがいるようだった。あっという間に目の前からこの世から消えていった、尊い人たち。

他の切り殺した人間が尊くないわけではない。勿論そんなわけがない。どうであれ私が彼らを殺したことによって、路頭に迷い食にすらありつけない妻子はたくさん生まれたの

は事実だ。そして彼らが抱く想いは皆一緒。
愛しい人を殺した相手への、限りない憎悪。
ならば、私がこんなにも苦しいのは。
「どうして、私」
あの子を殺してしまったの。
目頭が熱い。喘ぐようにして酸素を求めながら、それでも涙は止まらなかった。やわらかなフリルが濡れるのも構わずに必死に涙を拭って、それを終わらせようと冷たい手をぎゅっと押さえ込んだ瞼に押し付ける。泣いて、すべてが許されると思っているのだろうか、私は。そんな愚かな真似を、皇女である私はすべきではないのに。
「メアリエルは、あの人の命令に従って、君の飲み物に薬物を投与していた。君ほどそういったものに敏感な体質はないから、すぐにわかったけれど。でも、それが本当に、君の幼い頃を取り戻したかったからだと思っているのか」
違う、と首を振った。あんなものはふざけた口実だ。あれを信じるわけがない。
耳から入ってくる言葉は残酷なまでに冷たかった。優しいくせに冷めているこの声。問い詰めるような言葉尻さえも、無鉄砲な人を大切に思うからこそ溢れた声に聞こえて、私はもう一度首を振った。馬鹿な。ウィルは、ウィルじゃないのに。どうして、私は。
「調べたら、答えは簡単だった。彼女はあの人の作った薬物に犯されていた」
「そうだったら、薬物に犯されていたなら、私があの子を殺してもよかったことになるっていうの！？」
押さえつけていた感情が発露されたように声が荒くなった。それでももう、私は止められなかった。ウィルを見上げその無表情の中に含まれる哀しみを知って、だけど私は手を振り上げた。乱暴に何度も何度も子供のように彼を叩く。
「そんなの嘘よ！　そんなわけない、そんなのただ自分の言い分を通したいだけの戯言じゃない！」
ウィルは答える代わりにひどく乱暴に私を抱き寄せた。その仕草が少しだけ怖くて思わず手を止めて見上げれば、彼は苦しそうな顔をしていた。それはきっと、今の私の顔なのだろう。
ずっとするのさえ苦しかった呼吸が静かに落ち着いていくのを感じる。
ただどうしようもなく泣き崩れれば、ウィルはきっと抱きとめてくれるのだろう。そのまま意識を手放せば、きっと抱き上げて寝室に連れて行ってくれるのだろう。
そして、名前を呼んで、頬に触れて。
「シャルロット」
涙で濡れた唇を、温かなものがかすめたのは、きっと夢。